

# 野球部に入ろう

雪

神奈川県横浜市立つつじ山中学校。

戸田健太郎は、そう書かれた校門の前で立ち止まった。

つつじ山中学校——つつ中か。

(何だか言いにくいな)

健太郎は心の中で舌打ちをした。

門の先を見ると、校舎に続く道の途中に、まるで人の通行をふさぐように大きな木が立っている。

「ずいぶん大きな柿の木ね」

一緒にいる母親の由美子が、健太郎の視線の先を追いかけながら言う。

「あれ、柿の木なの？」

「そうよ。ほら、昔おばあちゃんの家にもあったでしょう。でも学校に柿の木があるなんて珍しいわね。秋には柿が食べ放題よ、きっと。あんた柿が好きだからよかったじゃない」

「まあね」

一応はそう答えたものの、本当のところ健太郎にとっては柿の木の事などどうでもよかった。あの木が柿だろうがもみじだろうがそんなのどうでもいい。

中三の四月。進級したばかりのこんな時期にまさか転校することになるとは思ってもみなかった。

できることなら、あのまま前の学校を卒業したかった。いや、卒業するつもりだったのに。健太郎はそう思ってから、慌てて顔を両手の手のひらでごしごしとこすった。

(ばか。今さら何考えてんだ、俺。仕方がないことなんだ。家族でさんざん話し合っただけじゃないか)

「何してんの？健太郎」

「いや、別に。何でもない」

健太郎は意識して口角を上に向けてみせた。転校なんかしたくなかった——。こんな気持ちを母さんに悟られたらやばい。

「それよりさ。母さん、さっさと行こうよ」

「もうちょっと待って。お父さんも仕事の都合がいたら来れるかもしれないって言ってたんだけど……」

由美子は首を伸ばして夫の文彦が乗ってくるはずの白い営業車を探した。

「いいよ。俺と母さんだけで。どうせ話聞いたりするだけなんだろう。部屋の片付けもまだ残ってるんだし。早く終わらせちゃおうよ」

こうなったらさっさとその転校手続きとかいうやつを済ませてしまいたい。どうせいくらうじうじしたところで俺はこの学校に通うしかないんだから。覚悟も決まるってものだ。

「うーん、そうねえ……。じゃあ、先に行きましょうか」

「うん！」

健太郎は由美子と一緒に、つつ中の門をくぐった。

「では健太郎くん。明日から待っていますよ」

校長室を出たところで、校長が黄色い歯をむき出しにしながら言った。

（うわ、マジ、ゴリラみてえ）

そう思った瞬間、つい吹き出しそうになり、健太郎は慌てて口を押えながら顔をそむけた。

「は、はい。こちらこそよろしく申し上げます」

由美子が健太郎に代わるように慌てて頭を下げる。そして、そのまま健太郎を軽くにらみつけた。

窓の外が騒がしくなっている。健太郎たちが校長室で、使用する教科書だの制服だの体操着だの話を聞いている間に放課後になったらしい。健太郎は廊下を歩きながら何気なく窓の外を見た。白いユニフォームが何人か目の前を横切っていく。

「野球部の子ね」

由美子がまた健太郎の視線を追いながら言う。

健太郎は、（当たり前だ、あれがサッカー部なわけないだろ）と思ったが口には出さず、「うん」とだけ答えてすぐに視線をそらした。

由美子は少し何かを考えているような顔をしたかと思うと、何を思ったかいきなり校長の正面に向き直った。

「あのう、部活動ですが、今からでも入部できますでしょうか」

「部活動ですか」

校長は明らかに戸惑ったように口ごもった。

「ええと・・・確か健太郎くんは、前の学校では野球部所属でしたか」

健太郎が黙っているのを由美子がええ、と答える。

「まあご存知でしょうが、六月には中学総体が控えています。三年生はその大会に負ければ即引退となるわけですから、もしかしたら活動できる時間はあまりないかもしれませんが入部は可能ですよ。担任と顧問に入部届けを出して下さい。明日担任を通じて届出用紙を渡しますから」

「ありがとうございます」

由美子の声にかぶさるように、イチニ、ソーレ、イチニ——、聞き慣れた掛け声が聞こえてきた。野球部がランニングを始めたようだ。

「よかったじゃない。健太郎」

由美子が興奮したように言ったが、健太郎は答えなかった。

——部活か。

嫌でも前の学校のことを考えてしまう。今年は県大会で優勝することが自分たちの目標だった。先輩たちが成しえなかった神奈川県制覇。それからもちろん関東大会でも勝って全国大会に行く——。一日でも多くみんなで野球をやること、それだけを目指して頑張っていた。三年生になり、やっとなここからという時に・・・。

親には言わなかったが、転校が決まった時点で健太郎は野球を続けることをひそかにあきらめていた。それは決して健太郎の本意ではなかったが、そう思うしかなかったのだ。総体まであと約二ヶ月。こんな時期から新しい学校で野球を始めたって意味がない。第一、三年生の新入部員なんか快く受け入れてもらえるとは思えない。ひんしゆくをかうだけだろう。

「ねえ、入部したら？」

反応がないことに心配したのか由美子が健太郎の顔をのぞき込むようにして言う。以前の健太郎ならこういう時

すかさず「うるさいな」くらいは言ったものだが、今の健太郎は母親に対してそういう態度は取れなくなっている。あのことがわかってからどうしても――。

「まだわかんないよ」

そう言葉を濁すのが精一杯だった。

「どうして？ あんたから野球を取ったら何も残らないじゃない」

「だからわかんないんだって」

「早く決めないと先生にもご迷惑なのよ」

「まあ時期も時期ですしね。じっくり考えて下さい」

校長がとりなすように言った。

時期が時期なんだからじっくり考えていたらすぐ引退になっちゃうじゃねえか。どこの学校でも校長ってのは矛盾したことを平気で言うもんだな。健太郎は由美子を追い越して玄関に続いている階段を下りた。急にひんやりとした空気が身体にまとわりついてくる。

由美子と健太郎が来客用の玄関でスリッパを脱いでいるところで、

「悪い。遅くなった」

父親の文彦が駆け込んできた。駐車場から急いで走ってきたのか、髪の毛が汗で乱れている。

「父さん、わざわざ来なくてもよかったのに」

息子にそう言われて、

「いや、でもまあ一応な」

文彦は気恥ずかしそうに笑った。

以前の文彦だったら仕事中にわざわざ抜け出してまで学校に来ることなんか絶対になかった。健太郎の学校関係のことは何から何まで全部由美子に任せ切りだったのに。やっぱりお父さんもあのことがあって変わってきたってことかな。健太郎はスニーカーのかかとをはきつぶしたままで外に出た。

「手続きは無事済んだのか。健太郎」

「たぶん」

そう聞かれても健太郎にはよくわからない。

「あのね、やっぱり教科書が前の学校と違うのよ。教科によっては同じものもあるんだけどね。だから健太郎には二、三日我慢してもらって。あとカバンなんかは前の学校のでもいいみたい」

「そりゃ今からわざわざ買うこともないだろ。あと一年で卒業なんだから。――おまえ、車までちょっと歩くけど大丈夫か」

「大丈夫よ。来る時は歩いてきたんだから」

「でも、疲れ過ぎるのはよくないって医者も言ってたし」

「平気だってば。それよりね、この学校、柿の木があるの。門から入ったところに。気付かなかった？」

「いや、急いで来たからな」

「珍しいと思わない？」

「確かに。普通学校にはないよな」

文彦と由美子は話しながら連れ立って歩き出した。健太郎は足を何とかスニーカーに押し込むと、両親の後ろを少し後れてついていった。

ボールがグローブのふちにぶつかった。

「悪い」

キャッチャーの高田悟が慌てて立ち上がり、転がったボールを拾いに行く。

「しっかり捕れよ。バーカ」

久慈亮太はいらついて舌打ちをした。へたくそ。おまえがそうやっていつも後ろにそらすから勝てる試合も勝てないんだよ。心の中でそう悪態をつきながら反対方向を見ると、見たことのない制服を着たヤツが校庭の脇を歩いているのが目に入った。親もいる。転校生か？ 部活見学でもしているのか三人で時々立ち止まってこっちを見たりしている。亮太も目を細めてその転校生を見た。なんだ、あのチビ。今どき坊主かよ。三年生が今頃転校してくるわけないから下級生か――。急に亮太の中にいつものわけのわからない感情がわき起こった。

「りよっち、ごめん」

戻ってきた悟がそう言いながら亮太にボールを投げてよこす。亮太はボールを一、二度手の中で転がすと、いきなりまだ座り切らない悟に向かって思い切り放り投げた。その球は大きく弧を描いて悟のはるか頭上を抜けていった。

「何やってんだよ、りよっち」

悟が怒鳴ったが亮太は謝らなかった。悟はまた何か言いかけたが、すぐ思い直したように唇を噛んだ。そして

、

「ちゃんと投げろよ」

それだけ言うと、また立ち上がり亮太の投げたボールを拾いにいった。

――ああ、イライラする。

亮太ははずみをつけて足元の砂を蹴り上げた。悟とは、亮太が今のアパートに引っ越すまでは同じ社宅に住んでいたこともあり、ガキの頃からいつも一緒に遊んでいた仲だった。お互い気が強かったからよくケンカもしたけど、それでも亮太にとって悟は唯一本音を言い合える相手だった。少なくとも亮太はそう思っていた。が、その関係は二人が中学で野球部に入り、上級生に交じって一緒にレギュラーを取るようになってから少しずつ変わってきた。それは付き合う相手が変わってきたとか物理的なことではない。悟が感情を抑えるようになったのだ。実際悟がどう思っているかはわからないが、亮太の目にはそう映った。去年の夏、当時の三年生が引退し、悟が野球部の部長になってからはそれが顕著になった。悟は亮太に対して明らかに距離を置くことが多くなった。今みたいに、昔だったら殴りかかってきたようなことでも絶対にぶつかってこない。本当は言いたいことがあるくせに自分から一歩引いてしまう。

自分だけいい子ちゃんになりやがって。

亮太は悟の後ろ姿をにらみつけた。と、ちょうどあの転校生が校門を出て行くのが見えた。

ケッ、中学生にもなってよく親と一緒になんか歩けるな。ばかじゃねえの。

亮太がいらつく気持ちを持って余すようにまた砂を蹴り上げようとした時、いきなり背中に衝撃が走った。サッカーボールが当たったのだ。

亮太が振り向くと、

「ごめん」

ニヤニヤ笑いながらサッカー一部のヤツが立っている。

「このやろう、ふざけんなよ」

「わざとじゃないんだよ。お互い様だろ」

亮太はサッカー部のヤツの胸ぐらをつかんだ。

それを見て、慌てて悟が駆け寄ってくる。

「バカ、りょっち、やめろって。総体に出られなくなるぞ」

「うるせえな、いちいちキャプテンづらすんなよ」

亮太はグローブをグラウンドに叩きつけた。放課後の校庭に少年たちの嬌声と、砂ぼこりが舞い上がった。

「俺、やっぱり野球部に入るよ」

夕食の席で、健太郎は両親に向かってそう切り出した。

「そう、よかったじゃない」

ついだばかりの味噌汁に口をつけようとしていた由美子が目も上げずに言った。それはまるで、そのことには大して関心がないかのようなさりげない言い方だった。しかしその瞬間、由美子が心底ほっとしたような表情をしたのが健太郎にはわかった。急な転校によって息子から野球を奪う結果になってしまったことを由美子が心底申し訳なく感じていたという事実には健太郎は改めて気付かされた思いがした。

「決めたか」

文彦が力を込めて言う。

「うん、まあ今からじゃあんまり時間ないけどね」

「それでもいいじゃないか。ここまでせっかく続けてきたんだから。やれるところまでやってみろ」

「そうだね」

「頑張りなさいね。健太郎。お母さんも一生懸命協力するからね」

「やめてよ。母さん」

健太郎は慌てて箸を置いた。

「別に何もしなくていいってば。洗濯も俺自分でできるし、試合の時の弁当も自分で作る。だから母さんは何も――」

「何言ってるの」

由美子は、健太郎を正面から見据えながら言った。

「あんたが洗濯だのお弁当だの、そんなこと気にしなくてもいいの。そういうことはお母さんの仕事なんだから」

「だけど・・・」

「応援にだってバンバン行っちゃうからね」

「とにかく無理だけはしないでよ」

「はいはい。お母さんのことは何も心配しなくていいから。健太郎は自分のことを頑張りなさい。レギュラーにだってなれるかもしれないんだから」

いや、それはないな。

健太郎は好物のメンチカツをかじりながら思った。特別上手だとか或いは部員が極端に少ないとかならともかく、そうでなければ今から新しいチームに入ってレギュラーを取るなど到底無理だろう。

健太郎が野球を始めたのは小学校二年生の時だ。当時の親友からその子のお父さんが監督をしている地域の野球チームに誘われたのがきっかけだった。初めの頃は練習が終わってからもらえるお菓子目当てに通っていたようなものだったが、ルールを一通り覚え、何とかボールが取れるようになるとすぐに夢中になった。野球をすることが楽しくて仕方がなかった。しかしそれほど打ち込んできた野球であったが、健太郎は今までレギュラーになったことはない。リトルリーグ時代はショートの補欠、前の学校でもセカンドの二番手で、公式試合では正二塁手の調子が悪い時に時々出してもらえる程度だった。それでも健太郎は野球が大好きなのだった。実力はともかく、野球に対する思いだけは誰にも負けないと思っている。

そんな野球をやはりここでやめたくはなかった。それに――もし自分が新しい学校で野球を少しの間でもやるのが母さんにとってもいいことなら。レギュラーになれるかどうかなんて問題じゃない。野球は続けよう。母さ

んが言うように自分から野球を取ったら何も残らないのだから。そう心が決まったのだ。

それと。健太郎は三個目のメンチカツにかぶりつきながら今日見た校庭でのことを思い出した。あのピッチャー。チラッと見ただけだけど結構いい球を投げている。あんなピッチャーがいるチームならもしかしたらいいところまでいけるかもしれない。

「お代わりは？」

由美子が健太郎の鼻先に手を突き出している。一瞬「自分でするからいいよ」と言いかけたが、「ほら」と由美子に促され、健太郎は空になった茶碗を素直に差し出した。由美子が満足そうな表情を浮かべて立ち上がる。

風の音に顔を上げると、いつもの健太郎の横顔が窓に映っていた。

翌朝。

「早くお友達ができるといいけど」

由美子がトーストにバターを塗りながらため息交じりに言う。

「それもう何回目だよ」

健太郎は呆れた声で言い返した。

「だってねえ。お友達ができなかったら心配なもの」

「おまえなあ。健太郎ももう小学生じゃないんだから」

文彦が新聞に目を落したままで言う。

「お友達ができるかどうかっていう問題に小学生も中学生もないじゃない」

「だからそういうことは親がいちいち心配しなくても自分で何とかするさ、なあ健太郎」

健太郎は炒めたウィンナーを咀嚼しながら黙って首を縦に振った。

「まあこの子は昔から友達がわりとすぐできる子だったからそんなに心配はしてないんだけど」

「じゃあ心配しなきゃいいじゃん」

「自分でもそう思うんだけどね」

「はいはい。もういいから。俺そろそろ行くよ」

健太郎は残っていた野菜ジュースを飲み干して立ち上がった。・・・ったく。朝っぱらから由美子のいつ終わるかわからない話をこれ以上聞かされるのはたまらない。大体友達なんか嫌でも自然にできるだろう。学校に行けば同じ年のやつがそこらへんに何十人もいるんだから。

「道はわかる？」

「うん。わかるわかる」

「初日だけでも車で送っていくか」

文彦が新聞をたたみ、立ち上がった。

「そうね。そうしなさい」

「いや、いい、いいよ。いいから」

健太郎は慌てて玄関に走った。親の車で学校に行くなんてとんでもない。誰かに見られたらそれこそ友達なんてできないじゃないか。それにもうこの辺りの道は引越して来た日に路地という路地まですべて自転車で走り回ったからほとんど頭に入っている。健太郎は前の学校の校名が入ったカバンを持って家を出た。まだ教科書が揃っていないせいで妙に軽いカバンがワイシャツの背中を叩くように揺れた。

「よろしく」

休み時間に、真っ先にそう声をかけてきたのは、隣の席のひょろんとしたヤツだった。下頬がふくらんでいるところがどこことなくムーミンに似ている。

「——どうも」

健太郎は軽く会釈しながら内心ほっとしていた。朝、由美子にはああ言ったものの、やっぱり誰も声をかけてくれなかったらやばいなあと少々不安ではあったのだ。何しろ転校生という立場になったのは義務教育八年目にして初めてなのだ。でもこれで滑り出しは何とかうまくいきそうだ。

「藤沢・・・司くんか」

健太郎はムーミンの名札を見ながら言った。

「うん。でも、つかかでもいいよ。みんなそう呼ぶし」

「つかかだね、わかった」

「健太郎くんは？　なんかあだ名とかあるの」

「あだ名っていうか……。前の学校ではとだけんて呼ばれてた。戸田健太郎だからとだけん」「とだけんか。じゃあ僕もそう呼ぶよ。いいよね？」

つかかは、上背に似合わないかん高い声を出した。

「もちろん。ところでさ、藤沢く……。いや、つかか。野球部の部長って知ってるかな。入部届を出したいんだけど――」

「えっ、とだけん野球部に入るの？」

つかかが、眼鏡の奥の、決して大きいとはいえない目を見開いて言った。

「まあ一応ね」

「僕も野球部なんだ」

「あっ、そうなの？」

「補欠だけどね。部長は悟。高田悟。隣のクラスだから僕も一緒にいくよ」

「サンキュ」

健太郎はつかかの後について教室を出た。廊下に出ると男子生徒たちが意味もなく走り回っている。どこの学校でも同じだな。ここだけを見ると何だか前の学校にいるような気がしてくる……。健太郎はいつのまにか前の学校を思い出してしまっている自分を振り切るように頭をぶんぶんと振った。

つかかが隣のクラスを覗き込んでいる。

「悟くーん。ちょっと」

悟、くん？　同じ部員なのに、くん付けか？　健太郎は少し妙に思いながらつかかの視線を追った。

「あ？」

教室の後ろの方にいたグループから一人が抜け出してこっちに向かって歩いてくる。

(あ……。あいつ、昨日キャッチャーをやっていたヤツだ)

健太郎は、昨日見た部活の様子を思い出した。アイツが部長だったのか――。

「なんか用」

悟は健太郎とつかかの前にぬっと覆いかぶさるように立った。

(で、でかい……)

健太郎は一瞬息を飲んだ。自分が標準よりは小柄なのを差し引いてもでかい。百八十センチ、いやもしかしたらもっとあるかもしれない。身長だけでなく、肩の辺りの肉付きといい、腰回りといい、体格はまるで高校生だ。こうして目の前に立たれると同じ年だとわかっていても威圧感を感じる。

「あ、あのさ。この人、うちのクラスに今日転校してきた戸田健太郎くん。入部希望なんだって」

つかかが慌てたように言う。

「入部って――三年生だよな。今からか？」

悟は健太郎を不思議な生物でも見るような目で見下ろした。

「まあね」

健太郎は少しむっとしてぶっきらぼうにそう返した。

「ポジションはどこ」

「一応セカンド」

「セカンドか。セカンドには和久井がいるからな。あいつ何て言うかな」

悟は独り言のように言った。健太郎は何と言えればいいのか迷った。

「いや、それは気にしなくていいよ。別にレギュラーを狙おうなんて気はないから」と言い切ってしまうのも悔しい気がするし、かといって堂々とレギュラーを取りに行くつもりだとも言い難い。親とも話したように、おそらくそんなことは無理に決まっている。でも、その和久井とかいうヤツの実力がどの程度のものかわからない以上、もしかしたら・・・という思いも正直いつてある。割り切っていたとはいえ、やはり野球をやるからには少しでもチャンスがあるなら狙ってみたい。

そんな感情をとっさに言葉にすることができずに、健太郎は黙り込んだ。

「まあ、わかったよ。入部届けは俺から顧問の先生に渡しとく」

悟はニキビの目立つ頬を緩めた。

「今日から練習に来て。よろしく」

ちょっと無愛想だが嫌なヤツではなさそうだ。

「よろしく」

健太郎も笑い返す。

「よかったね。練習一緒に行こうね」

つっかに、うんと答えながら、健太郎は自分の奥から何か熱いものが急にぐんぐんとつき上がってくるのを感じていた。

「おまえが戸田とかいうやつ？」

昼休みにトイレから出た時だった。待ち伏せしていたのかと思うようなタイミングで、見たことのない（もっとも、健太郎にとってはまだこの学校のほとんどのヤツがそうなのだが）ヤツが声をかけてきた。やたら目が釣りあがっていて、どこかで見たことのあるような顔をしている。

「そうだけど」

「おまえ、セカンド希望なんだってな」

もう知れわたったのか。ということは、こいつも野球部なのか。それにしても誰かに似ている。誰だっけ。健太郎はそんなことを考えながら、

「まあ一応」

と答えた。

「悟から聞いたと思うけど、俺もセカンドなんだよね」

「ああ、じゃあ・・・和久井くん？」

和久井はそれには答えずに、

「悟とも話したんだけど、今日俺とおまえでレギュラーテストすることになったから」

と言った。

「レギュラーテスト？」

「ノックとバッティング。で、どっちがレギュラーか決める。早速で悪いんだけどさ、俺ら総体までもう時間がないし、さっさと決めちゃおうぜ、ってことになったんだ」

レギュラーテストか。健太郎は心の中で繰り返した。転校初日からいきなりテストを受けさせられるとは思ってもいなかったけれど、考えようによってはチャンスかもしれない。

「それで文句ねえよな」

「うん」

とうなずいたものの、何だかすっきりしない。何でだろう？ 健太郎は改めて目の前に立っている和久井を見た。健太郎とさほど背丈は変わらないのだが、アゴ先を上げているせいか見下ろされているような気がする。そしてその目つき・・・どう見てもにらまれているとしか思えない。これだ。健太郎は和久井の鋭い視線からさりげなく目をそらしながら思った。目つきだけじゃない。コイツの話し方、態度、何もかもがどうもケンカごしなのだ。何か言われるたびに、いちいち脅されているような気分になってくる。

「じゃ、ちゃんと伝えたからな。あとでグダグダ言うなよ」

和久井はアゴをしゃくりながらそう言い、少し離れたところで待っていたグループと一緒にそのまま自分の教室に戻っていった。気のせいかそいつらも健太郎をにらんでいた気がする。あいつらも野球部なのか？ それにしても・・・だいぶ風当たりが強そうだ。健太郎は気持ちを落ちつかせるためにとりあえず手を洗うことにした。生ぬるい水に指先を浸しているうちに、まあ仕方ないかもな、という気になってきた。自分と立場を置き換えてみれば、中学最後の総体を控えたこんな大事な時期にどこの馬の骨とも知れない転校生が自分のポジションを狙っているとわかればそりゃあいい気はしないだろう。まあ、だからといって、ああもあからさまに感情をむき出しにされるとちょっとへこむけどな。

「ま、やるしかないだろ」

自分にカツを入りたい時にいつもするように、健太郎は鏡を見ながらそう声に出して言った。

（あっ、これだ！）

和久井の顔に似ている誰かが高杉晋作だと気付いたのは、それから一時間後、六時間目の歴史の時間だった。



放課後。

ラッキーなことに今週健太郎の班は掃除当番ではないらしい。壁の掲示物によると、来週から何と二週続けてトイレ掃除となっているが、この際先のことはどうでもいい。いつだって一番大事な今はこの時なのだ。

(ツイてる、ツイてる)

机をズルズルと音を立てながら下げ、練習着とグローブの入ったバッグを持ち、健太郎が早速、教室を出ようとすると、

「待ってよ、とだけん」

つっかが声をかけてきた。

「とだけん、どこ行くの？」

「どこって・・・部室、体育館の脇だったよね」

「そうだけど、部室は狭いから、僕たちはいつも空き教室で着替えることになってるんだ。階はこの下。一緒に行こう」

「僕たち、は？」

健太郎は思わずそう聞き返した。

(じゃあ他の誰かは部室で着替えるのか?)

まさか下級生が先輩をさしおいて堂々と部室を使うとも思えない。だったら誰が部室を使うんだ？ 疑問がわいてくるが、ここはとりあえずつっかについていくしかない。

階段を下り、廊下の一番端の部屋に入ると、とたんに身体中がホコリっぽい匂いに包まれた。

「生活室なんて名前がついてるけどさ、ほとんど男子の更衣室にしか使われてないんだ」

つっかの言う通り、他の部のやつらも何人か練習着に着替えている。が、健太郎たち以外はどう見ても一、二年生のようなのだ。

まあどうでもいいか。健太郎はホコリが積もって白っぽくなっている床にドンとバッグを置いた。これからレギュラーテストだ。余計なことを考えている余裕なんかない。できる限りのことはやってやろう。

「ねえ、和久井ってさ、どんなやつ？」

健太郎はシャツのボタンを外しながら聞いた。努めてさりげなく聞いたつもりだったがそれはいまいち成功しなかったらしく、つっかは変な顔をした。

「どんなって？ とだけん、和久井くんと何かあったの？」

「いや、何もないよ。ただ・・・ほら、そいつがセカンドのレギュラーだって聞いたからさ」

「ああ、とだけんもセカンドだったよね。そうだな、野球はうまいよ。お父さんがリトルの監督やってるからね。確かお兄さんも大学で野球やってるとか言ってた」

「へえ」

「僕も小学校の時和久井くんのお父さんのチームにいたんだよ」

「そうなんだ」

小学生からのチームメイト。そして同じ野球部。なのに、またくん付け？ すいぶん他人行儀なんだな、そう思ったが、それは黙っていることにした。

「えっ？レギュラーテスト？何それ」

次に変な顔をするのは健太郎の番だった。

「何って、つか知らないの？」

「うん、知らない」

「みんなそのテストを受けたんじゃないの」

「いや、聞いたことないよ」

「じゃあ、どうやってレギュラー決めたの」

「どうやってって、まあ最終的には先生が決めるんだからよくはわからないけど、別に、テストなんかしなくても上手な人は上手っていうか」

「まあそりゃそうだろうけどさ」

窓の近くに誰かが忘れていったのか小さな手鏡が置かれている。健太郎はその鏡をのぞきながら帽子をかぶった。よし、野球小僧の一丁上がり。

「でも、とだけんの場合はきっと特別なんじゃないかな。三年生だからこれからじっくり実力を見るってわけにはいかないし、とにかく頑張るよ。応援してるから」

「うん、サンキュー」

二人は階段をほとんど転がるように駆け下りてグラウンドに向かった。健太郎にとっては新しい学校で始まる部活動の第一日目。記念すべき日なのだ。

「みんな集まれ！」

悟の号令で、てんでんばらばらに素振りなどをしていた部員たちがネットの前に集まった。

「和久井。戸田」

名前を呼ばれて和久井がのっそりと前が出る。健太郎も慌ててそれに従う。

「二人にはもう話してあるけど、今からどっちがセカンドのレギュラーになるかテストを行う」

部員たちの間からヘーッという好奇心丸出しの声が上がる。

「そんなのやらなくても和久井のがうまいに決まってるだろ」

誰だ？今の。健太郎は反射的にその声がした方をにらみつけた。自分でもかなり目つきが険しくなっているのがわかった。

「何だよ、このチビ」

一昔前なら間違いなく野球部を破門になりそうな長髪のやつがこっちに向かって飛び出しかけたが、

「卓也、いいからやめろって」

両隣のやつにがっちり腕をつかまれて足をブラブラさせた。「離せよ」と勇ましくもがいているわりには、何だか大人に遊んでもらっている幼児みたいだ。

何だよ。人にチビと言うわりには自分こそチビじゃないか。健太郎は顔を戻しながら小さく舌打ちをした。

それにしても、和久井といい、この卓也とかいうやつといい、ここの野球部はずいぶん気性の荒いのが多いんだな。

「一応ちゃんとしないと不公平だろ」

悟が「一応」のところアクセントをつけて言う。

それはもったもだが、こいつもいちいち言葉がきつい。健太郎は帽子を深くかぶり直した。

「まずは守備テストをやる。順番にノックを受けてもらう。連続で百球。ただしミスがあったら初めから数え直し。いいな」

な、何だって？

健太郎は思わず目を丸くした。百球くらいのノックは今まで何度も受けてきたが、ノーミスでとなると話は全く変わってくる。

「悟、さすがに百は無理だろ。暗くなるぞ」

やった、助け舟が入った。そう進言してくれたのは、昨日悟とピッチング練習をしていたピッチャーだ。練習着の右胸の辺りにかろうじて読み取れるほどの濃さで「久慈亮太」と書いてある。

「そうだな・・・」

悟は少し考えて

「よし、じゃあ半分の五十だ。おまえらもそれでいいだろ？」

と健太郎と和久井に向かって言った。

「別に俺は百でもいいけど」

和久井が健太郎をチラリと見ながら言う。けっ、この野郎、と思ったが健太郎はさすがに「俺も」とは言えなかった。

「一年、球拾いにつけ。他の者は見学してろ」

「あれ、山下先生は？」

誰かが聞いた。

「どうせ会議だろ」

「じゃ、ノックどうすんだよ」

「いい。ノックは俺がやる。」

悟がそう言ってバットを振り出した。待てよ。ノッカーは誰でもいいけど、顧問がいなきゃあテストの結果は誰が判断するんだよ。健太郎がそう思っているそばからいきなりボールが飛んできた。

「先、和久井。行くぞ」

「おう！」

和久井が素早い動きでボールをさばく。

——う、うまい。つかが言っていた通りだ。健太郎はごくりと唾を飲み込んだ。

これはかなり気合いれないとやばいぞ。

和久井は難なくノーミスでのノック五十球を終えた。

よし。次は俺の番だ。健太郎は左手にはめたグラブを叩き気合を入れて走り出した。

「こい！」

しかし悟は、健太郎を無視するように後ろを向いてしまった。

「誰かノック変わってくれ。腕が痛いんだ」

「横山、おまえやれよ」

卓也に背中を叩かれて「は、はい」のっそり立ち上がったのは小太りの二年生だった。

こ、こいつがノッカー？健太郎は意外な展開にびっくりして立ちつくした。

「戸田、こいつのノックでいいだろ」

悟が腕を押さえながら言う。まあこの際誰でもいいか。

「いいけど」

健太郎は曖昧にうなずいた。

しかし——いざノックが始まると、誰でもいいどころではなかった。こいつがまたとんでもないヤツだったのだ。横山の打つ球は健太郎のいる場所まで届かない。じゃあ、と近くでかまえると今度は外野に飛んだりする。これじゃノックにならない。ましてノーミスで五十球なんて絶対に絶対に無理だ。一球ごとに部員たちの中からワーッと笑い声が上がるのも腹だたい。俺は見世物かよ。

「戸田。ちゃんと捕れよ」

その笑い声の間から妙に落ち着いた声が聞こえた。

何だって？

健太郎はもう少しでその声の主である悟につかみかかりそうになるところだった。

ちゃんと捕れ、だって？冗談だろ。それを言うならあのデブにもっとまともなノックをさせろよ。

どこに飛ぶのか皆目わからないボールを必死で追いながら何とか三十二球まできたところで、次の三十三球目。ボールはノッカーである横山の真上に高く上がった。

げっ、キャッチャーフライかっつーの。

「どけ！」

健太郎はぼさっと自分の打った球の行方を眺めている横山を突き飛ばしながら必死で腕を伸ばしたが無常にもボールは健太郎のグラブの横をかすめて落下した。

「いいかげんにしろよ！」

健太郎の中でついに何かが切れた。

こんなのテストじゃない。ただのしごき、いや、悪質ないじめだ。

「こんな球、捕れるわけないだろ。ふざけんなよ。誰か他のヤツに変えてくれ」

「す、すいません。僕……」

横山が今にも泣き出しそうに下唇を震わせた。大きな体をかたつむりみたいにすぼめている様子はいかにも気の毒だがこの際気にしちゃいけない。

「人のせいにすんなよ。自分が下手なんだろ」

卓也だ。

「は？もう一回言ってみろよ」

「おまえが下手だって言ってるんだよ。野球の腕だけじゃなくて耳も悪いんだな」

部員の中から失笑がもれる。

「この……」

もう我慢できない。卓也に向かっていこうとした健太郎を、

「もういい」

悟が制した。

「何だよ。もういい、って」

「次、バッティングやるぞ！」

おい、無視かよ。そう言いかけて健太郎は慌てて言葉を飲み込んだ。これ以上このぼかげたノックを続けなくていいのならもう何だっていい。ふと顔を上げると和久井と目が合った。何と薄笑いを浮かべながら「バーカ」と口を動かしている。かなりむかついたが、息があがって言い返す気力が出ない。

「ピッチャーは好きなやつを適当に指名していいぞ」

好きなヤツと言われてもな。健太郎は呼吸を整えながら部員たちの顔をさっと見渡した。当然だが、まだ顔と名前が一致しないやつばかりだ。悟——こいつは仕切り役だし、あとは……さっきつかかかってきた卓也。手にしているグラブを見るとどうやらピッチャーらしいがあんなやつには死んでも頼みたくない。

「柴田、おまえ投げろよ」

和久井は早速昼休みに一緒にいた取り巻き連中の一人に声をかけている。

じゃあ、つかかにでも頼むか。健太郎がつかかのところに行こうと歩きかけた時、

「俺がやるよ」

おもむろに立ち上がったのは、久慈亮太だった。次の瞬間部員の中から今度はどよめきのような声が上がった

。何だ？この反応は。健太郎は亮太がわざわざ自分のバッティングピッチャーに立候補してきたことよりも、他の部員のリアクションに驚いて足を止めた。

「りよっち。おまえは——」

すかさず悟が前が出る。

「何だよ、誰だっていいんだろ」

「だけどさ」

「俺じゃだめなのかよ」

「いや——」

「何だよ」

「――いや、何でもない。ごめん」

悟は明らかに何か言葉を飲み込んだ、そう健太郎は思った。よくわからないがとりあえず健太郎のピッチャーは亮太に決まったようだ。

「よろしく」

と言う健太郎を無視して、亮太はあごをしゃくった。さっさとバットを持ってという意味らしい。

――あーあ、どいつもこいつも感じ悪いな。挨拶くらいできないのかよ、ったく。

健太郎は心の中で思い切り毒づきながら、ネットの前に立てかけてあるバットの中から一本を抜き取った。

「それぞれ五球ずつでいくぞ。そのうち何本外野に飛ばしたかを見る。ボールはカウントしない。あ、それとストライクを見逃したらそこで終わりな」

「待ってよ。顧問の先生がいないみたいだけど、結果は誰がどうやって判断するわけ」

ようやく通常の心拍数が戻ってきたところで、健太郎は悟に聞いた。だした。

「嘘だろ。あいつ和久井にまだ勝つ気でいんのかよ」

「ばかじゃねーの」

誰かのぼそぼそとした話し声が耳に飛びこんでくる。声をひそめてはいるが、わざと聞こえるように言っているのがわかる。

「俺があとで責任をもって先生に報告する。それでいいだろ」

健太郎は黙って顔を縦に振った。

「誰かキャッチャーできるやつ二人出ろ。それと審判」

悟の命令で下級生たちがさっと動き位置につく。

「先、和久井」

和久井は柴田の投げたトータル九球のうち、ストライクゾーンに入った三球を外野に飛ばした。そのうち一本はこの校庭がもう少し広かったら完全にホームランになったのではと思えるほどの当たりだった。

次は俺だ。

健太郎はバットのグリップをぎゅっと握った。実はバッティングはそんなに自信がない。身体のことを言い訳にはしたくないが、やはりガタイのいいやつにはどうしてもかなわないのだ。外野まで飛ばせるだろうか。それも和久井の打った三本より多く。たぶん、いや絶対に無理だ。いっそのこと、もうテストはやめる、セカンドは和久井でいいよ、と言って自分から降りてしまおうか。その方がこれ以上みんなの前で恥をかかなくてもいいかもしれない……。

そんな気持ちのまま投げやりにバットを振ると、生まれたての風が顔に吹きついてくる。（何考えてんだ、俺は）

素振りを重ねるうちに健太郎は頭の芯がすっきりと冴えてくるのを感じた。

（やるしかない）

もう和久井とのレギュラー争いなんかどうでもいい。そもそもこんなテストなんか大した意味はないんだ。頑張るのはただ自分のため。それだけだ。

「おい、まだかよ」

マウンドでいかにも手持ち無沙汰というふうなボールを片手でトスしていた亮太がじれたように言う。

「ごめんごめん」

健太郎は慌ててバッターボックスに入った。立ち位置を決め、マウンドに向かって、

「こーい！」

大声を出す。もちろん自分に気合をいれるためだ。

マウンドで亮太が大きく振りかぶった。ボールが手を離れる。

——それはほんの一瞬のことだった。気がつくときッチャーが後ろにひっくり返っている。

(嘘だろ……)

一瞬の沈黙の後、ワーツと歓声が起こった。

な、何だ、この球は？　すごい。すごいなんてもんじゃない。これが中学生の投げる球か。百三十キロ、いや、ひよっとしたら百四十は出ていたかも。

「あのう、ストライク……なんですけど」

審判役の二年生が申し訳なさそうに腕を半分ほど上げる。

健太郎ははっとして後ろを見た。そうだった。見逃したらそこで終わりだったんだ。だけど今は、今の球は……。

「も、もう一球」

健太郎は亮太に向かってバットを突き出した。

「戸田。おまえずるいぞ」

鬼の首でも取ったかのように卓也がわめき出す。

「ルールがあんだろ。プライドねえのかよ」

何と言われてもいい。もう一球、いやもっとあの球を見たい。

「いいよ。サービスしてやるよ」

悟が言った。

「今度見逃したらもう終わりだからな。りよっち、頼む」

卓也はまた何か言いかけたが、

「アホらし、やってらんねえ」

グローブを叩きつけて部室に入っていった。

「……悪い」

健太郎はバットをかまえ直した。昨日校庭の端から見たのと間近で見るとでは球の威力が全然違う。「ちょっといい球」どころじゃない。こんなに速い球を近くで見たのは生まれて初めてだった。そしてこんなピッチャーを見たのも……。

亮太がふりかぶった。また見逃すわけにはいかない。健太郎は思い切りバットを振った。

しかしすでにボールはキャッチャーのミットに収まっていた。

「ストライク！」

あと三球。外野に飛ばすどころかバットにかすりもしない。せめてバットに当てたい。

健太郎はバットを短く持ち、バッターボックスぎりぎりに立ち位置を変えた。こんな付け焼刃みたいなことでどうかなるとは思わなかったが、少しでも可能性があるなら何でもやってやろうという気持ちだった。

しかし——健太郎のバットは結局一度も亮太の投げたボールに当たらなかった。健太郎が顔を上げた時には亮太はすでにマウンドを降りた後だった。

「やった、やった！」

いつのまに帰ってきたのか卓也がこれ見よがしにはしゃいでいる。まるで引退試合にでも勝ったかのような騒ぎだ。呆然と立っていると、

「戸田」

悟が後ろから声をかけてきた。そして健太郎が振り向くのも待たずに、

「悪かったな」

それだけ言うと、健太郎がえっ、と聞き返したのにもかまわず、さっさと部員たちの方へ走って行ってしまった。

どういう意味だ？

「とだけん・・・」

つつかがおそろおそろといったふうになついてくる。

「残念だったね。でも仕方ないよ。久慈くんの球は誰も打てないんだから。だから、とだけんも・・・」

「そんなに気をつかってくれなくてもいいよ」

健太郎は笑いながら制するように片手を上げた。

「俺さ、変なんだけど、今、何かすっごいワクワクしてるんだよね」

健太郎の言葉につっかは露骨に変な顔をした。頭がおかしくなったのかと思ったのだろう。しかし健太郎の言ったことは嘘ではなかった。負け惜しみでもない。

本当に心の奥にある何かがワクワクしている。この気持ちは何だろう。清々しさ、というのもちよっと違う気がする。うまく言葉にできないが、大げさというなら歴史の証人となるような場面に偶然出くわした時のような・・・そうした類の臨場感に似た気持ち・・・。もちろん、今までにそんな経験をしたことはないのだが。

「悟、座れよ」

亮太がピッチング練習を始めたようだ。――バシッ。亮太の投げるボールが、悟のかまえたミットに収まっていく。その小気味いい音が夕陽に染まったグラウンドに何度もこだました。

こんなふうに、健太郎のつつ中での部活第一日目が終わった。

「それがさ、ほんとすごいんだよ」

ネギとカラシを混ぜた納豆をグルグルとかきまぜながら健太郎が言った。夕食に納豆。この献立は戸田家では普通のことだ。朝、納豆を食べるとネギの匂いで口の中がずっと気持ち悪いから嫌なんだよね、と、何年前に健太郎が言い出して以来これが定番となった。実際ネギを大量に食べると食後にいくら菌をみがいてもすっきりしないのだ。だからといって納豆にネギを入れないわけにはいかない。ネギのない納豆なんてありえない。これは、健太郎のあまり多くないこだわりの一つだ。

「りよっちの球。あ、りよっちってのは、ピッチャーの久慈くんのこと。悟がそう呼んでんだよね。あ、だから悟ってのはね——」

「キャプテンの子でしょ。あんたの話聞いてたらもう覚えちゃったわよ」

「そうそう、でさ、それがすっごい速い球なんだ。ただ速いだけじゃなくて、うーん、何て言ったらいいかな。ほら、よく野球マンガにあるじゃん、バッターに向かってくるボールがどんどん大きくなって見えるような絵がさ。実際あんな感じだったんだよね。初めて見たよ、あんなの」

「昨日投げてた子だよな。そんなにすごいのか」

文彦が健太郎から納豆のパックを受け取りながら言う。

以前なら夕食の時間に文彦が食卓にいるなんて日は休日を除いて一日もなかった。

いや、その休日だって、急な出張に休日出勤、あるいは接待ゴルフとまともに家にいる方が少なかったと思う。それが今はこうして三人で一緒に夕食を食べる日が週の半分くらいになっている。その間会社用の携帯は何度も鳴るが、よほどのことがない限り文彦が以前のように会社に戻ると言って家を飛び出して行くことはない。しかしはっきり言って、小学生の頃ならともかく健太郎はもう夕食時に父親がいるからといって別段嬉しがるような年ではなくなっている。むしろ仕事の鬼のようだった文彦が、今はできる限り家庭に居ようとしている、その理由がはっきりわかっているだけに複雑な思いだった。

(何もそこまで無理することはないんだ。かえって、今までと変わりなくやってくれた方がいい)

これが健太郎の本音でもある。しかしこのことは、健太郎の自分勝手な思いであることもわかっている。とても口に出せることではない。そもそも由美子が健太郎と同じ気持ちかどうかはわからないし、由美子自身が文彦が家に居ることを望んでいるのならば、健太郎の出る幕ではないのだ。

「ところでおまえ、結局レギュラーにはなれなかったのか」

といきなり文彦が痛いところをついてきた。

「たぶんね」

健太郎はできるだけ感情を入れずに答えた。その淡々とした言い方がかえって悔しさをこらえているようにでも見えたのか

「いいの？それでも」

由美子が探るような目で聞いてきた。

「うん。俺、もうレギュラーがどうか、どうでもよくなってきたんだよね。マジで。そんなことよりあんなすごい球を投げるやつと同じチームになれたことが嬉しいっていうかさ。あいつ——りよっちと野球が一緒にできるだけでもラッキーだなんて思って」

それは本心だった。決して負け惜しみではない。素直にそう思えた。それほど亮太の球はすごかった。それに——。三年生の部員は健太郎を入れてちょうど十八人。転校生とはいえ、よほどのことがなければベンチには何とか入れてもらえるだろう。ベンチにさえ入れれば試合に出られるチャンスはあるはずだ。和久井だって調子が落ちる時だってあるだろうし、そうしたら……。

「そうか。ま、頑張れ」

文彦はいかにも取ってつけたように言い、新聞に目を落した。朝は時間がないため、いつも帰宅後に朝刊を斜め読みするのが長年の習慣になっている。

「総体まで、試合はないのかしら」

「いや、まだ四月だし、練習試合なら何度かあるはずだよ。公式試合はどうかわかんないけど」

「何でもいいのよ。楽しみだわ。健太郎の試合」

「やっぱ、来るの？」

「当然。お父さんも行くでしょ？」

「ああ、そうだな。健太郎がそこまで言うほどのすごいピッチャーならぜひ見てみたいからな」

珍しく文彦は新聞を最後までめくらずに途中で畳み直したものを食卓の隅に置いた。

「ほんとね。約束してちょうだいよ」

「わかってるよ」

リトルの頃は文彦が試合の応援に顔を見せたのはせいぜい五、六回程度で、それも車を出したり墨審をしたりする当番に当たった時のみ、渋々といった調子だった。そんなだから、試合のたびにマメに顔を出す父親と比べられては、よく由美子に責められていたものだ。それにしても、総体の時ならともかく、たかだか練習試合に両親がわざわざ揃って見にくるなんて……。勘弁してよ。と思ったが健太郎は何も言わなかった。ちょっと前だったらこんな流れになろうものならすかさず「来なくていいよ。てか来るなよ」などと気軽に言っていたものだが、今はそういう類のことはどうしても口にできなくなっている。

「来なくていいよ。てか来るなよ」

健太郎は飲み込んだ言葉を豚肉やインゲンと一緒に思いきり咀嚼した。

「ダッシュ一人二十本！」

ランニングが終わったと同時に悟の声がグラウンドに響いた。

校庭五周走ってすぐのダッシュか。

(きついな……)

健太郎はグラウンドの土ぼこりと大親友にでもなったかのように離れたくないと抵抗する体を無理矢理引き起こした。

(も、もうだめだ……)

最後のダッシュが終わると健太郎の心臓は破裂するのではないかと本気で心配になるほど波打っていた。部室の前にある水道まで這うようにして行き、生ぬるい水を飲む。カバンの中には家から持ってきたスポーツドリンクが入っている。一晩冷凍しておいたから今頃はちょうどいい加減に冷えているはずだが、カバンを置いてある犬走りまで走っていく元気が出ない。前の学校ではこれくらいの練習でばてることなんてなかったのに。転校やら何やらでバタバタしているうちに体がなまってきたのかもしれない。これからかなり気合入れてやらないとやばいな。

健太郎が息を整えていると、

「次はキャッチボールだよ。とだけん、一緒にやろう」

つつかが背後から声をかけてきた。

「うん、いいよ」

健太郎は口元をぬぐい、グラブを取った。暴れまくっていた心臓も何とか落ち着いてきたようだ。

「よし、やろうぜ」

悟と亮太がキャッチボールを始めている。その横に立とうとした健太郎を

「待って、とだけん」

つつかが止めた。

「あっちに行こう」

「えっ？」

「いいから」

つつかは、悟たちがキャッチボールをしている脇を抜けてプールのある方向に走って行く。

「どこ行くんだよ」

健太郎は怪訝に思いながら仕方なくそれについていった。

プールの南側に、グラウンドとは別の、花壇に囲まれた場所がある。昨日は確かここで陸上部のやつらがストレッチなんかをやっていた。

「さ、やろう」

「はっ？ こんな隅っこでやるの？」

「僕たちはいつもここでやるんだよ」

「なんで？」

「なんでって……何となく決まってるんだ。校庭は狭いし、あっちはレギュラーの人たちでいっぱいだから」

「……」

健太郎は周囲を見回した。健太郎たちの他にも何人かここでキャッチボールを始めている。ということは、ここにいるヤツは一、二年生以外はみんな補欠のやつらということか……。しかしそんなバカな話があるだろうか。

レギュラーはグラウンドを使って、補欠は隅っこだなんて。下級生ならともかく、同じ三年生なのに。健太郎は横でキャッチボールを始めた小太りと肥満体のペアを見た。確かこいつらも三年だ。まだ話したことはないが、昨日から廊下で何度か見かけている。健太郎と向き合った位置にいるのが小太りで、胸にやたらとはっきりした字で曾根と書いてある。

健太郎はその小太りに近寄って腕をつかんだ。ちょうどボールを投げようとしていた曾根がぎょっとしたように体を硬くする。

「な、なに？」

「ごめん。邪魔して。あのさ。俺たちもあっちでやろうよ。ここ狭いしさ」

健太郎はつつかや他のやつらにも聞こえるくらいの声で、グラウンドを指しながら言った。

「やめてよ。いいんだよ、ここで」

「どうして」

「気楽だしさ。気を使わなくていいし」

「気をつかうって……。あいつらに？」

健太郎はグラウンドにいる悟たちを見てあごをしゃくった。

「ま、まあね……」

「同級生だよ。気を使うもなにもないじゃん」

「だから、いいんだってば」

曾根は明らかに迷惑そうに眉をしかめると、まるであっちに行けとでもいうように健太郎の顔の前で右手をひらりとさせた。

——けっ、俺はハエかよ……。

「もう、とだけん。早く！キャッチボールの時間終わっちゃうよ」

つつかがたまらないというふうに声を張り上げている。

どうしてもすっきりしないが、今は議論している時間もない。ここはとりあえずおとなしくこの場所でキャッチボールをやるしかなさそうだ。

「わかった。ごめん」

健太郎は何とかいきり立つ気持ちを抑え、ボールを握った。その時だ。

「危ない！」

向こうから亮太の声がした。顔を向けると、グラウンドの方からこっちに向かって一直線にボールが飛んでくる。

やばい。つつかに当たる……！

そう思った瞬間、ボールはつつかの脇腹に当たる直前に運よく急速を失って下に落ちた。

つつかは、何が起きたのかわからないといったふう立ちすくんでいる。その時初めて自分をめがけて攻撃中だったボールの存在に気付いたらしい。

ボールを拾いに来た亮太が、健太郎とつつかをじろりと見た。そして、

「あーあ。危ないってちゃんとやったのに、無視されちゃったあ」

明らかに嫌味っぽくそう言い、すぐに行ってしまった。

(何だ、あいつ。ごめんくらい言えないのかよ)

健太郎は心の中で文句を言った。

(・・・ったく。まあいいか)

改めてボールを握り直し、

「つか、行くよ」

健太郎が声をかけると

「やばいよ、どうしよう」

つかが泣きそうな顔になっている。

「何だよ、どうしたの」

「無視したわけじゃなかったんだ。聞こえなかったから」

「ああ・・・。あんなの気にしなくてもいいよ」

「僕が無視したと思ったよね、久慈くん」

「だからどうでもいいって、そんなの」

「でも・・・どうしよう」

つかは何度もどうしよう、を繰り返す。これではキャッチボールどころではない。

「集合！」

悟の声がした。結局キャッチボールは一球もできなかった。仕方がない。

「行こう、つか」

健太郎はなぜか異常に気にしているつかの背中を押すようにして走り出した。

ふと見ると校庭と道路を区切っているフェンスの向こうで誰かがこっちに向かって手を振っている。

何だ、あのお婆さん。

怪訝に思って目をこらすと、

「げげっ」

何と、そのお婆さんは由美子だった。健太郎が自分に気付いたのがわかると、由美子は更に大きく手を振り始めた。「け・ん・た・ろ・う」と唇を動かしている。

「あれ、とだけんのお母さん？」

つかが不思議そうに由美子と健太郎を交互に見る。

「さ、さあ」

健太郎は適当にごまかすと、走りながら由美子に向かって小さく「あっちに行けよ」という仕草をした。由美子はさもおかしそうに健太郎をにらむ真似をして、あろうことかあかんべーをして去っていった。

「とだけんのお母さん、おもしろいね」

「いや、そうでもないけど」

全く、練習までいちいち見に来るなよな。恥ずかしい。

健太郎は今の由美子とのやり取りをつか以外、誰にも見られなかったことを祈りながらバットを手を取った。

「ねえ、とだけん。久慈くん怒ってないかな」

つかはまだ言っている。この怯えようは何だろう。あんなのどうでもいいことなのに。

「怒るも何もさ、あれはあっちが悪いんだから」

「でも、久慈くんがせっかく危ないって注意してくれたのに」

「くれた、って……」

健太郎にはさっぱり理解できなかった。

部活が終わり、一緒に校門を出るとつかはまだ落ち込んでいた。あんな些細なことがそんなに気になるのだろうか。

「気にしなくてもいいってば、つか」

健太郎が声をかけると

「うん・・・」

力なく下を向く。

何だか様子が気になるが、家の方向が別なのでここで別れるしかない。

「じゃあ明日ね」

「うん」

「気にしなくていいからね」

健太郎はもう一度念を押すように言い、つかの後ろ姿を少しだけ見送ってから歩き出した。

四月とはいえ、五時半を過ぎるともう辺りは真っ暗だ。学校の周辺は住宅地ということもあり、大通りに出るまでは不気味ささえ感じるほどの薄暗さが続く。

その大通りに出る信号の手前まで来たところで、自分の少し前を野球部のユニフォームが歩いているのに気付いた。ナイキの青のカバン。すごい数のストラップがジャラジャラと揺れている。あれは——亮太だ。

（よし）

健太郎は、小走りで亮太に近付いた。方向が同じなら一緒に帰ろう。そう思ったのだ。あんな速い球を投げられるヤツだ。彼と野球の話をしたらきっと盛り上がる。そうすればこの重いカバンを背負って帰る二十分ほどの道のりも少しは楽に感じられるかもしれない。

「りよっち！」

背後から思い切ってそう声をかけると、亮太がものすごい顔をして振り向いた。

「誰だ、おまえ」

「あ、ごめん」

その迫力に健太郎は思わず謝ってしまった。何も謝ることなんかしてないのに、と思ったのはすでに言葉が口をついて出たあとだった。

「りよっち？何だ、それ」

「あ、いや、みんなそう呼んでたからさ」

「みんな？みんなって誰だよ」

りよっちと呼んだのがよほど気に入らなかったのだろうか。悟や和久井なんかが、りよっちりよっちと言っていたので、ちょっと真似してみたただけなのだが・・・いけなかったのだろうか。またついゴメンと言ってしまいそうになるのを健太郎は意識して押さえ込んだ。

「ふざけんなよ」

亮太はまたじろりと健太郎を睨みつけ、早足で歩き出した。

「待ってよ、りよっち・・・いや、久慈くんも家こっちなのか？だったら一緒に帰ろうよ」

亮太の足が止まった。そして今度は妙にゆっくりとした動作で振り向き、

「おまえ、うぜーよ」

そう吐き捨てるように言うと、まるで競歩の選手かと思うほどのスピードで行ってしまった。

(な、何だあれ・・・)

健太郎はただ絶句するしかなかった。全身で拒否されたような気がする。いつだったか国語で習った「とりつく島がない」というのはまさにこういうことだと思った。

(俺、もしかしてあいつに嫌われてる？でも・・・何で?)

つかのあの様子といい、亮太といい、健太郎には何がなんだかわからないことばかりだった。

そもそも部員同士ってのは基本的に仲良くするものじゃないのか？いや、普通そうだろう。だって同じチームメイトなんだから。それに久慈亮太——あいつに嫌われるようなことをした覚えは何もない。なのに一体なんで？

健太郎をそこに置き去りにしたまま、亮太とナイキのカバンがあっという間に薄暮の中に見えなくなっていった。

学校の先にある陸橋を渡り終えてすぐのところに亮太の住むアパートがある。傾斜のきつい階段を上り、無言のままドアのノブを回す。家に帰っても「ただいま」と言わなくなったのはいつ頃からだっただろう。大体そう言ったところでお帰りと迎えてくれる人は誰もいないのだ。ここに越してから数日は家の中に誰もいないことがわかっていても、いちいち大きな声で「ただいまあ」と言っていたものだがすぐにばからしくなってやめた。

ドアを開けると、部屋の奥で騒ぎ声がある。姉のみちるがまた友達を呼んで騒いでいるのだろう。みちるは本当なら現在高校二年生のはずだが、昨年の秋喫煙が見つかって停学になったのをきっかけに学校を辞めてしまい、以来適当にアルバイトをしながら好き勝手に暮らしている。

「あー、重」

亮太は散らばった靴の上にカバンを落とし、トレシューを脱いだ。脱いだ制服、グローブ、肩を冷やさないためのグラウンドコート、スパイクーそれらを詰め込んだカバンは鉛でも持ち歩いてるかのように重い。

アパートは玄関を上がるとそのまま台所という造りになっている。つまり玄関から流し台の様子が丸見えなのだ。朝に使った食器が置きっ放しになっている食卓の上にカップラーメンが積み上げてある。亮太は泥がこびりついたユニフォーム姿のままやかんを火にかけた。

「なんだ、あんた帰ってたの」

みちるが部屋から出て来た。

亮太はそれには答えず、黙ってみちるの前を通り過ぎた。この女のことを姉だと思ったことは一度もない。ていうか思いたくもない。毎日毎日ろくでもない連中とつるんでいるようなバカなんか。ただうざいだけだ。

「おい、無視すんなよ」

「うっせえな」

亮太はみちるをにらみつけた。

さすがに弟とはいえ、自分よりも体の大きい男にすごまれると怖いのだろう。みちるは一瞬怯えた顔をして、

「何だよ、このバーカ」

と捨て台詞を吐いて部屋に戻っていった。

「バカが帰ってきてさあ。え？ 弟だよ弟。いいんだよ、あんなの関係ねーから。バカなんだよバカ」

わざと大声でバカを連呼する。

ああ、何もかもがうざい。うざ過ぎる。亮太は時間も計らずにいきなりカップラーメンのフタを開け、麺をすすった。口の中で噛み砕かれるそれが固いのか柔らかいのかもよくわからない。

両親が離婚して、母親と姉の三人で社宅からこのアパートに引っ越して来たのは亮太が五年生になってすぐの頃だった。離婚の理由は亮太にはわからない。ただ母親の智恵子が当時住んでいた社宅にいる奥さんたちとの関係をうまく作れなかったことが原因だと大人の誰かが口にしていた気もするが実際はどうだったのか知らない。ここで暮らすようになってから智恵子は保険の外交員として働き始めた。

「あんたたちのためにお母さんは血反吐吐きながら頑張っているんだからね。わかってんの！」

あんたたちのために。あんたたちのために。智恵子がヒステリックに叫ぶたびに亮太は胸の中が荒れた海のようにひどく揺れるのを感じる。今は確かに母親の稼いだ金で食べている。それは事実だ。でもそれを俺にどうしろというのだろう。

「あーあ。あんたたちさえいなければねえ。私一人だったらどうにでも好きにできるのに」

智恵子はよくため息混じりにそんなことをつぶやいている。

「だったら産まなきゃよかったじゃねえか！勝手にセックスして産んだくせに人のせいにすんなよ！」

真正面から反抗するのはみちるの方だった。亮太はただただ十五歳という自分の年齢をやりきれなく思う。早く大人になりたい。それだけが今の願いだ。亮太の考える大人の定義はもちろん自分の力で金を稼げるということだ。

両親が離婚してから学校の授業参観も野球の試合もただの一度も智恵子が見に来たことはない。いや、ただ一度だけ・・・リトルにいた頃、母親同士でやっているお茶出しが何かの当番の日にも智恵子が顔を出さないの、世話役のおばさんに亮太がひどく怒られたことがあった。

「いい？ちゃんとお母さんに言っついてちょうだい。子供がお世話になっている以上は決められた当番の仕事くらいはしっかりやらしてもらわなきゃ困るんだって。他のお母さんたちはみんな子供のために時間をやりくりして頑張っているんだから。忙しいのはあなたのお母さんだけじゃないのよ。わかる？ こんなことが続くんならはっきり言ってもう亮太くんにはチームをやめてもらうしかないからねっ！わかった？」

そのおばさんに言われた通りのことを智恵子に伝えたかどうかは記憶にない。が、結局智恵子は一度だけグラウンドに来た。自分が当番に当たっている日にたった一度だけ。智恵子が他のお母さんたちに交じって、シートを引いたり、お茶を運んだりしていることが亮太にはとても不思議な気がした。智恵子が亮太のために時間を使ったのは後にも先にもあの時だけだった。しかし、そんなことも今となってはもうどうでもいいことだった。

「お客さんと会う約束がある」といって智恵子はしょっちゅう家にいない。みちるはあの調子だから亮太は家の中で大抵一人だ。しかしこの家庭のことについて亮太は別段深く考えたりはしない。こんなものだと思っている。本当にどうだっていいのだ。ただあいつ――最近転校してきた健太郎とかいうあのチビ。ああいういかにも親に守られていますみたいなお坊ちゃんお坊ちゃんしたやつを見るとなぜかムカムカしてしまう。怒りが込み上げてきてどうにも押さえようがなくなる。ド下手のくせに野球部に入ってきたやがって。

(殺してえ)

亮太は容器の底に溜まったスープを飲み干した。

次の日曜日は練習試合だった。対戦相手は隣の区の東中。場所はつつ中グラウンド。

当日の朝。アップを終えたところで、

「えー、メンバーを発表する」

監督が言った。野球部の顧問兼監督は英語の山下先生だ。どうやら部活動を熱心にやるタイプの先生ではないらしく、普段はほとんど練習に顔を出さない。その山下先生はでっぷりと突き出たお腹の下に隠れているベルトをさわりながらメモを読み上げた。

「一番ショート草野元気。  
二番ライト中村俊太郎。  
三番ファースト佐久間圭吾。  
四番キャッチャー高田悟。  
五番センター植田直人。  
六番セカンド和久井順平。  
七番ピッチャー久慈亮太。  
八番サード佐々木卓也。  
九番レフト立花秀樹。以上」

(つてことは……)

健太郎は必然的にベンチ入りとなる残りのメンバーを見渡した。

小太りの曾根一世(いっせい)。肥満体の荒川裕輔。この二人は、何をするにもいつも一緒だ。こいつらホモか  
とつい勘ぐりたくなる。ちょっとキモイ。

他のメンバーは、六波羅清斗、前田和則、畠山悟朗、手塚翔、橋本弘毅、そしてつつかと健太郎だ。

両チームのシートノックが済み、試合が始まった。

ベンチに座り、健太郎がふと目を上げると、背後に文彦と由美子が並んで立っていた。

(げ。やっぱり来てる)

目が合った瞬間由美子がこっちに向かって手を振りかけたのがわかり、健太郎は慌てて前に向き直った。

(勘弁してよ。。。)

そんな自分たちの様子をマウンドにいる亮太が露骨に睨みつけていることに健太郎は気付くはずもなかった。

先攻はつつ中。一番草野が内野安打で出塁。次の俊太郎が巧妙なバントで二塁に送ったが、続く三番四番が惜しくもピッチャーゴロ、サードゴロと倒れた。

「よし行くぞ！」

レギュラー陣が一回目の守備につく。今日も亮太の調子は良さそうだ。球が走っているのがベンチから見ている  
もよくわかる。相手チームの一、二番を難なく三振に押さえる。

「ベンチ声出せよ！聞こえねえぞ」

いきなり和久井がベンチに向かって怒鳴ってきた。

「はっ？」

冗談だろ。健太郎は心の中で突っ込んだ。さっきからどんだけ声出してると思ってんだよ。何しろ声出しには人  
一倍自信がある。リトルの頃も前の学校でも、監督から、おまえが一番声が出ているといつもほめられていた

のだ。しかし聞こえないと言われれば仕方がない。

「シャー、シャー」

健太郎は更に声を張り上げた。

「ベンチ声出せって言ってんだろ！」

今度は卓也だ。

「出してんだよ！」

健太郎は和久井に向かって思わずそう言い返した。

「はっ、聞こえねえんだよバカ」

「この——」

ついキレそうになるがまさか試合中に身内同士でケンカするわけにもいかない。健太郎は何とか感情を抑え込んだ。

「とだけん、あんまり怒らないほうがいいよ」

つつかがそんな健太郎の顔を見ながら冷静に言う。

「だってさ、俺たちちゃんと声出してんじゃん」

「うん。でもあの人たち、いつもああ言うんだよ」

「そうだよ。僕たちがどんなに声出したって、ちゃんと出せって言うんだから」

荒川が大きな体をねじりながら拗ねるように言う。

「・・・」

健太郎はベンチにいる奴らを改めて観察してみた。確かに見たところ、どうも覇気がないというか、いや決してそういうわけではないのだろうが要するにパッと見はそう見えてしまうのだ。でも決してみんなポケットと座っているわけじゃない。声も健太郎ほど大きくはないけどそれなりに出している。

「じゃあ、あんなこと言わせないようにもっとしっかり声出そうぜ」

その時だ。

カキーン。

珍しく亮太の球が外野まで飛ばされた。全員の目がライトに集中する。コースといい、風向きといい、普通なら何てことのない平凡な外野フライになるはずだった。しかし、ボールはライトの秀樹が差し出したグローブを大きくそれた。

「ああー」

ベンチ全員が一斉に立ち上がる。

ボールはみんなのため息をあざ笑うように転々と転がっていく。慌ててセンターが追いかけるがその間にランナーは一気に三塁まで進んだ。

「何やってんだよ！」

「ライトしっかり捕れって」

「てめえ、ボサツとしてんじゃねえぞ」

とたんにレギュラーのやつらが秀樹を責め始める。言葉の集中攻撃だ。

(ヤバイ)

健太郎は下級生が持っているメガホンを引つつかみ、

「ドンマイドンマイ！」

大声で叫んだ。が、秀樹はがっくりとうなだれたままだ。

——これは交代だな。

健太郎はひそかにそう思った。ライトの控えはつかだ。

「つか。ライト交代かもよ」

つかにそっと耳打ちする。

「そんなわけないよ」

「だけど秀樹があれじゃさ」

「絶対、交代なんかないってば」

つかの言う通り、山下先生は腕組みをしたまま何のアクションも起こさない。

とりあえずもうちょっと様子を見るのか……。

試合が再開した。亮太が三塁ランナーに目をチラッとやってから腕を上げた。スクイズを警戒し過ぎたのか悟がボールを後ろにそらした。

「ああっ！」

健太郎たちがまた立ち上がる。一気に三塁ランナーがホームに走ってくる。相手チームから歓声上がる。一点先制されてしまった。

「悪い」

悟がボールをゴシゴシと拭きながらマウンドに駆け寄った。

「おいキャッチャー」

「ちゃんと捕れよ」

「ふざけんなよ」

さすがに相手がキャプテンだからか、さっきの秀樹の時のように大声で罵倒するヤツはいないが、あちこちから非難めいた声が漏れ聞こえてくる。

またかよ。

健太郎は呆然とした。

この雰囲気悪さは一体何なんだ？ 誰一人としてドンマイと声をかけない。ミスした選手をひたすら責めるだけ。こんなチーム今まで見たことがない。

だが悟は秀樹のように明らかに落ち込んだようなそぶりは見せなかった。亮太の背中を軽く叩き、淡々とした調子でホームに戻っていく。

「しまっぺいこう！」

マスクを付け直した悟が、みんなに向かって両手を上げるが誰も答えようとしない。その代わりに、

「おまえがしまっぺやれや、ボケ」

誰かのボソツとした声が聞こえた。

だめだ、こんなんじゃチームワークがめちゃくちゃだ。この試合ヤバイかも……。

しかし健太郎の心配をよそに、亮太が相手に点を与えたのはこの時の一点だけだった。

後はほとんどの回を三者凡退で抑える見事なピッチングだ。一方、つつ中は三回ワンアウトから卓也が二塁打を放ったのを皮切りにヒットが連続し、八対一と東中を大きくリードしていた。六回裏。ツーアウトランナーなし。相手打者のバットが空を切る。小気味いいほどのテンポで亮太が打者を追い込んでいく。この回もどうやら0点で終わりそうだ。

「次の回俺たちも出してもらえるかもよ」

健太郎の言葉につっかが心底驚いたというふうに目を丸くした。

「どうしてさ」

「どうして、って次もう最終回だろ」

「ありえないよ」

「でも七点差だしさ。素振りやっこーぜ」

健太郎はバットを持って立ち上がった。ガンガン素振りをしてやる気のあるところを監督にアピールするという算段だ。

前の学校ではこの作戦が結構成功して、ここぞという時によく使ってもらったものだ。

「ほら、みんなもやろうよ」

健太郎はバットを振りながらベンチにいる他の選手に声をかけるが誰もものってこない。

「ばかばかしい」

「無駄だって」

こいつら少しでも試合に出たいと思わないのか？その素朴な疑問が顔に出たのか、つっかが見かねたように近付いてきた。

「とだけん、あれ見てみなよ」

「あれって？」

「監督だよ」

健太郎はベンチの脇に仁王立ちしている山下先生を見た。グラウンドの方に顔を向けたままピクリとも動かない。まるでそこに置かれた巨大な人形のようなのだ。

「どうせ僕たちのことなんか見ちゃいないんだよ、先生は」

うーん、確かに……。さっきから先生がこっちを気にしている様子はない。まるで無関心といった感じだ。それどころか試合そのものもちゃんと見ているのかどうか怪しい。立ったまま寝ているのではないかと心配になるほどとにかく動きがないのだ。

いや、まさかな。健太郎は頭を振った。あんなふうに見せといてひそかに俺たちを観察しているのかもしれない。いや、きっとそうだ。

健太郎は気合を込めてバットを振り続けた。試合に出してくれという必死のアピールだ。

――試合が終わった。最終回、相手のエラーでまた一点を追加し、九対一。つつ中の圧勝だった。普通ならこれほどの大差がつけば補欠の選手も試合に出してもらえるはずだ。公式試合ならともかくただの練習試合なんだから。しかしとうとう最後の最後まで監督が健太郎たちに声をかけることはなかった。

試合には勝った。でも……。健太郎は静かにバットを元の場所に戻した。そしてどこか割り切れないものを胸に感じながら試合後の挨拶に走った。

「今日の試合どうだった？」

皿や小鉢が並んだ食卓。戸田家の夕食メニュー定番の納豆をかきまぜながら健太郎は口火を切った。自分の方から親に試合の感想を求めたりするのは珍しい。

「もう、そんなにかきまぜないでよ。健太郎」

納豆の糸を引かせるのをあまり好まない由美子が眉間にシワを寄せながらそれを受け取る。

「よかったじゃない、勝って。圧勝だったでしょ」

「うーん、でもさ」

「何か不満なの？」

「そんなわけじゃないけど」

健太郎が口ごもると、

「試合に出られなかったからか？」

文彦が身もフタもないことを言う。一瞬グサツときたがこまではっきりと言われるとかえってさっぱりする。

「まあそれもあるけど・・・チームの雰囲気が悪いんだよ。一回にライトがエラーしたじゃん。みんなであんなに責めるなんておかしいよ。前の学校だったら必ずドンマイって声を掛け合っただのに。監督も何も注意しないし変だよ」

「おまえ、前の学校ではこうだった、っていうの、あんまり言わないほうがいいぞ」

「・・・んなの、わかってるよ」

今度は結構マジでムカツときた。そんなことはわかってる。だから友達の前ではこんなこと口にしなかった。家族にだから本音を言ったのに。

「チームカラーはそれぞれだからな。優しくかばい合うチームもあればそうじゃないチームもある。どっちがいいとは一概に言えないんじゃないか」

「でも責めることはないと思うよ。誰にだってミスはあるしさ」

「だったらおまえがそういうチームに変えていけばいいんじゃないか。不満だけグチグチ言っても何も変わらないぞ」

むかつく。最高にむかつく。健太郎は怒りで頬がかつと熱くなるのを感じた。

わかってる。わかってるんだ全部。だけど・・・一言でいいからそうだくらい言ってくれてもいいじゃないか。少しくらい共感してくれたって。。

「監督が能無しなんだ」

父親に対する憤りがいつになく健太郎を能弁にさせていた。

「俺があんなにアピールしたのに気付きもしないし。監督のくせに、部員のことなんか全然見ちゃいないんだ。普通あんな状況なら最後の回くらい試合に出してくれるもんなのに。やる気がないんだよ。あの先生」

「健太郎。おまえは大差がついた時にちょこっと試合に出してもらおう、そんなので満足なのか？」

「・・・」

だめだ。これ以上話を続けたら本気でキレそうだ。

健太郎は黙ったまま納豆ご飯をかきこみ、最後の一口を味噌汁で流し込むと席を立った。

「健太郎もういいの？お魚半分残ってるわよ」

「いらない」

健太郎は大きな音を立てて自室のドアを閉めた。

本当は九時から見たいお笑い番組があったのだが、もうそんな気分じゃない。部屋にこもったところで、テレビもパソコンもないからマンガを読むくらいしかすることがないのだがそれでもいい。今は一人でいたかった。

「あんな言い方しなくてもいいじゃない。健太郎むっとしてたわよ」

由美子がアジの塩焼きが半切れ残った皿にラップをかけながら言った。

「そうか？」

文彦は平然とテレビを見ながらビールを飲み続ける。

「健太郎がああ言うのももつともだと思う。私も同じこと感じたもの。チームの雰囲気、実際あんまりよくなかったじゃない。レギュラーの子たちはみんな何だか偉そうで感じ悪かったし、逆に補欠の子達は遠慮しているような感じで……」

「チームカラーってのがあからな」

「それはわかったけど。でもね、昼間トイレに行った時に応援に来てたお母さんに話しかけられたの。藤沢司くんって子のお母さん。あ、司くんってね、健太郎と同じクラスの子で、早速お友達になったみたい。健太郎ったら学校のこと家で何にも言わないんだもの。『うちの子、健太郎くんが転校してきてよかったって言うんですよ、いつも仲良くして頂いてありがとうございます』なんて挨拶されちゃって何だか恐縮しちゃった。あ、でね、彼女が言うにはどうもチーム内にレギュラーとそうでない子の上下関係があるみたいなのよね。同じ学年なのにそういうのって変じゃない？」

「まあそうだけど、実際運動部なんてそんなものだよ」

「でもね、彼女結構部活のことで愚痴をこぼしてたわ。まあ、私が新顔だから言いやすかったというのもあるだろうけど。一世君ね、クラスでもレギュラーの子から、下手くそとか言われたり、いろいろ嫌な目にあっているみたいなの。大体監督からしてレギュラーびいきがひどいみたいよ。たとえば、今日みたいに大差で勝っている試合でも、監督は絶対に補欠の子達を使おうとしないんですって。藤沢さんが言うには、そんなの中学校の部活動なのにおかしい。もちろん実力に差があるのはわかるけど、部活動は教育の一環なんだからいつもいつも試合に出られない子の気持ちも少しは考えてほしいって。あなたはそんなの当たり前だって言うかもしれないけど、私は彼女の言うこともわかるな。今日だって、あなた見てた？試合中、その司くんがジャグの飲み物を飲もうとしたら、たぶんセカンドの子だと思うけど『おまえらは飲むんじゃねえよ。ただ座ってるだけのくせに』って言ったの。はっきり聞こえた。意地悪よね。とにかくあの子たちの態度はひどかったと思う。健太郎じゃないけど前の学校ではあんなこと考えられなかったわ」

「運動部なんて実力の差がそのまま上下関係になったりするもんさ。野球部なんてのは特にそうだろう」

「でもプロじゃないのよ。中学校の部活動なのよ」

それはわかる。だが……文彦はいかにも興味がないというふうに大きくあくびをし、グラスの底に残ったビールを飲み干して立ち上がった。

「もう、いつもちゃんと話を聞いてくれないんだから」

由美子が明らかに失望を含んだため息をつくのがわかったが、文彦はそれにはかまわずに、リビングのソファにごろりと横になった。

中学校の部活動で、実力の差がそのまま力関係になるのはおかしい。大人が是正すべきだ。これを仮にレギュラーの子供の親が言うのならそれはそれで一つの意見となる。だが補欠の子供の親が同じことを口にすれば、それは単なる我が子かわいさの戯言にしか聞こえないだろう。立場の違いというやつだ。そんなものだ、と文彦は思っている。しかしそのことを今、妻と息子に伝えるのは少し酷な気がした。-

体育館の裏手にちょうど周囲から死角になっている場所がある。このつつじ山中学校は大通りに面しているのと、三方を高層マンションに囲まれているため、敷地内が周りからいわば丸見えという造りになっているのだが、ここならちょうど体育館の壁に遮られて外から見られる心配もない。亮太がそこに行く時点で先客がいた。二人が壁にもたれて煙草を吸っている。金髪でガタイのいいほうは小野寺潤一で通称オノジュー、もう一人のひよろ長いのは紺野広明、ピロだ。二人とも小学校の頃からやんちゃなガキだったが今はすっかり不良中学生の見本みたいになっている。

「よ、りよっち」

ピロが片手を上げる。

「わりい、一本くれ」

「ほらよ」

亮太はピロからマイルドセブンスーパーライトを一本もらい、口にくわえた。火をつけ、煙を吸い込む。そしてその煙を空に向かって大きく吐き出す。

——ああ、落ち着く。

煙を吸って出す。この行為を繰り返すだけでやけにほっとした気分になるのは何でだろう。

初めて煙草を吸ったのは二年生の時だ。最初のごくたまにいたずらする程度だったが今はほとんど習慣になりつつある。学校にいる間ずっと吸わないのは辛い。

「りよっち、今日遊ばね？」

オノジューが誘ってくる。

「無理」

「何で」

「部活」

亮太はできるだけ言葉を節約しているかのように最短の言葉を使って答える。

「おまえよく部活なんかやってんな。かったるいべ」

「まあな」

「やめちゃえよ」

オノジューはバスケ、ピロはサッカー部に所属しているがほとんど活動には顔を出していない。バスケ部もサッカー部も割りと強くて県大会にも出ているくらいのレベルだ。正気なところ他の部員の奴らもこいつらに練習に来られても迷惑だろうと思う。そんな気配を察してか二人ともほとんど顔を出さない幽霊部員だ。

そのせいか会うたびにやめちゃえばと言ってくる。亮太もそのたびに適当にそうだな、と答えることにしている。亮太は自分でもどうして部活を続けているのかと聞かれれば明確には答えられない。別に三年間絶対にやり通すんだなどと気負っているわけでもないし、楽しくて楽しくて仕方がないというわけでもない。和久井や卓也なんかとはよくバカをやるが、心から楽しいというわけでもない。あいつらが親友かといえばよくはわからない。そもそも親友なんか誰だ何て考えたこともない。いや昔はこいつが親友だ何て信じていたやつもいたような気がする。純粹に野球ばっかやっていた小学生の頃……。放課後も散々野球をやってまた夕食後に社宅の庭であいつとキャッチボールをやっていたっけ。あいつ、悟は嫌な顔もせず何時間でも付き合ってくれた。あの頃はこいつは一生の親友だとずっとこういう関係が続くんだと思っていた。

亮太は深く煙を吸い込んだ。初めは肺に入れるのが何となく怖くていわゆるふかしの吸い方をしていたが今は普

通に吸えるようになった。

「おい」

急に潤に肩を叩かれ、見ると悟がこっちに歩いてくる。亮太のほうをまっすぐに見据えながら小走りで近付いてくる。亮太も悟の顔を睨むように見ながらわざと大げさなしぐさで煙を吐き出す。

「やめろよ」

悟が手で煙草を払った。

「何だおまえ」

潤がすごんだ。

「りよっちに煙草なんか吸わせんな」

「何だよおまえ。やんのかよ」

潤と慧の目がイキイキしている。こいつらは退屈を持って余している。ケンカの相手が向こうからやってきたとなればこいつらにとってこんな楽しいことはないのだ。

「りよっちと話があるんだ」

「まず俺らと話していけよ」

潤は悟の胸ぐらをつかみそうな勢いで前が出る。

「潤。いいって」

亮太は潤の前に体を入れた。こいつらと悟をケンカさせる気にはなれない。

「りよっち、おまえ」

潤は何か言いかけたが思いなおしたように「まあいいや」と言って煙草を足で踏み消した。

「先行ってるわ」

「いいのかよ潤」

慧がまだうずうずとしながら言う。

「まあいいさ。じゃな」

二人は校舎のほうに戻っていった。それを見届けてから悟が言った。

「うるせえよ」

「もうすぐ総体なんだぞ。俺らにとって中学最後の。見つかったらどうすんだ。総体に出られなくなる」

「そうなれば俺が部活をやめりゃいいんだろ」

「そんな問題じゃないよ。体にだって悪いし」

「ああもううるせえ」

亮太は上半身を一度前に折りたたんで勢いをつけて体を戻した。

「おまえ親かよ、先生かよ。いちいち俺の後付回してんじゃねえよ」

「誰が付回してんだよ。話があったから三組に行ったらいないからさ」

「何だよ話って」

「うん」

悟は一度息を大きく吸ってから口を開いた。

「先週の練習試合でさ、りよっちが投げたあれ、フォークだった？」

亮太は黙って悟のにきびだらけの顔を見た。あの試合で一度だけ悟が後ろにそらした球、あのことを言っているのだとわかった。あれはまさしく亮太が投げたあの球は悟の言う通りフォークだった。最近ひそかに練習してい

たのだ。最近落ちるようになったので試してみたくてあの場面で使ってみた。ただ想像していた通り悟は見事に後ろにそらしてくれたおかげで幻の一球に終わったのだが。

「いきなりだったから取れなくて悪かった」

「いつの話だよ。で？」 亮太はわざとぞんざいに言った。やっぱりこいつ気付いていたのか。

「でき。二人で練習したいんだ。次の試合では絶対にそらさないから」

「やだよ」 亮太はすかさず言った。

「でもまたあんなことがあったら」

「もう投げねえよ。キッチャーが取れなきゃ仕方ねえじゃん」

「だから練習しようって言ってんだろ」

「そんなことやってられっかよバーカ」

「りよっち」

亮太は、戻るわ、そう言ってそこを離れた。

「何でそんなふうになったんだよ」

背後から悟の叫んだ声突き刺さる。何でそんなふうにだって？それはこっちが言いたいよ。亮太はそのまま教室に戻る気になれずに、トイレに行った。鏡に向かって髪の毛を直す。自分の顔を見ているうちにどうしようもなくむかついてきて亮太はそこにあったバケツを思い切り蹴飛ばした。

健太郎たちの通うつつじ山中学校には「さわやか相談室」という何だかわけのわからない名前の付いた部屋がある。何でも、少子化によって学校に空き教室が増えたため、市内の小中学校すべてにこういう相談室を作らなければならないという決まりができたらしい。部屋には臨床心理士と書かれた名札を付けたお婆さんがいて、何か悩みがある生徒はいつでもカウンセリングを受けることができるというしくみだ。

しかし実際には、不登校気味のヤツが二、三人、避難所代わりに時々たむろっているだけで、相談室としてまともに機能していることはほとんどなさそうだった。

ある日の休み時間。このさわやか相談室のドアが開いて野球部の連中が突然現れた。卓也、圭吾、植田、和久井、そしてりょっち。およそさわやか相談室とは似つかわしくない面々だ。

「なあに？君たち」

臨床心理士の橘先生が慌てて立ち上がる。

「別に。ヒマだから見学」

圭吾がにこにこ笑いながら言う。やはりみんなそろって集団カウンセリングを受けに来た、というわけではないらしい。

「ここはカウンセリング以外では利用できないの」

「じゃあ、それやるよ」

「それならちゃんと予約して――」

「いいからいいから」

和久井が橘先生を制するように押し、無理矢理中に入った。

他の面々もそれに続く。

「へえ、すげえじゃん」

部屋に入るなり卓也が置いてあるソファに飛び乗った。

「俺、初めて入った」

「すげえ、こうなってんだ」

みんな勝手に室内を動き回り、部屋に置いてあるカウンセリング時に使う箱庭やゲームなどをいじり始めた。臨床心理士の橘恵子は慌てて止めに入る。しかし、中学生男子たちのテンションは一層高くなり、そのうちソファに上がって跳ねる者、備品を投げ合う者、大騒ぎとなった。困った橘は職員室に行き、助けを求めた。すぐに顧問の山下先生がやってきて、怒鳴った。

「おまえら、ここで何やってんだ！」

一瞬皆の動きが止まった。

「おまえら今日の部活は参加させない。あと次の大会には出場させないからな」

そしてその日の部活、五人は校庭の隅に立たされ見学させられたのだった。

「山下のやつ、本当に俺たちのこと、大会に参加させないつもりかな」

植田が直立不動の姿勢で、顔は正面に向けたまま言った。

「そんなわけねえだろ。俺らがいなくて勝てるわけないし」

「だよな」

「でもさ、むかつかね？」

五人が口々にそんなことを言い合っていると、荒川と曾根のペアが見学組の前を通り過ぎた。

まるでいつものかたきをとった気分にもなっているのか、これみよがしにはしゃいでいる。こっちをちらちら見て、笑い合ったりしている。

「あいつらむかつく」

卓也が二人をにらみつけた。

「そう思わね？」

「まあな」

亮太もうなずいた。

「おまえらしゃべらないで立ってろ」

すかさず山本先生の罵声が飛ぶ。

「むかつく」

五人は結局この日、他の部員の目にさらされながら最後まで立たされていたのだった。

翌日の放課後。

「ジャジャジャーン」

肥満体ペアの一人、荒川が犬走りの上に置いたカバンの中からピカピカのグローブを取り出した。

「わっ、すげえ」

肥満体ペアのもう一人の片割れ、小太りの曾根が早速奇声を上げる。

「昨日ゼビオで買ったんだ」

荒川はグローブを左手にはめてみせた。曾根の鼻先に示されたそれは、いかにもおろしたてといった風貌で黒々と光っている。

「これ店にあるやつの中で一番高かったんだ」

「へえ。でも前のも中学に入った時買ったばっかだったじゃん」

「まあね。でもあれ、もうだいぶボロくなってたからさ、お父さんがせっかく野球やってるんだから新しいの買えって」

「じゃあ、前の捨てちゃったの？」

「当然」

「いいなあ、俺も買おうかなあ」

「やっぱり新しいのはいいよ」

「ちょっと貸してよ」

「いいけど・・・汚さないでね」

荒川が渋々グローブを外そうとした時だ。ボールがいきなり荒川めがけて飛んできた。反射的に顔をそむける。ボールはかろうじて荒川の顔の横をかすめて後ろに転がっていった。

「危ないだろ！」

怒鳴りながら顔を上げると、そこに亮太が立っていた。鬼のような形相でこっちを睨んでいる。ボールを投げたのは亮太だった……。荒川は怒鳴ったことを激しく後悔した。つい、ごめん、と謝ってしまいそうになる。

「拾いに行けよ」

「えっ？」

「拾えって言ってんだろ」

何でボールをぶつけられそうになった自分がそれをわざわざ拾いに行かなければいけないのか。どうにも納得がいかないが仕方がない。荒川は亮太に言われるまま、巨体をゆするようにして、水道の所まで転がったボールを拾いに行った。そのボールを荒川が亮太に返す。と、またすぐに亮太が荒川に向かってボールを投げる。すごいスピードだ。今度はよけ切れずにボールは荒川の右肩の辺りに当たってはね返った。

「いてっ」

荒川は思わず左手のグローブで肩を押さえた。

「捕ればいいじゃん」

亮太がアゴをしゃくりながら言う。

「せっかく新品のグローブ、パパに買ってもらったんだろ。けどどうせおまえなんかまともにグローブ使う機会なんかねえんだからよ。俺様が相手してやるよ」

亮太はまるでマウンドに立っている時のように両腕をふりかぶった。

突然の展開に、曾根はどうしていいかわからず犬走りの上を一人ウロウロしていた。

同じ野球部員とはいえ、亮太を初めとするレギュラー組と、曾根たち補欠組はいつもはほとんど関わることがない。和久井や卓也あたりが時々嫌味を言うことはあっても、あとは全く存在を無視されているといってもよかった。それが今日に限って何だかってこんなに執拗にからんでくるのだろう。全くわけがわからない。しかし何度もボールを拾いに走らされている荒川を見ながら、亮太のターゲットがどうやら自分ではないことに明らかにホッとしてもいた。

亮太がボールを投げる。ボールがそれで転がる。亮太に命じられるまま荒川がそれを拾いに行く。またすぐに亮太が投げる。荒川が走る……。これはいつ終わるんだろう。もしかしたら永遠に解放されないんじゃないかと荒川が本気で心配し始めた時だ。

「はっ、犬みてえ」

亮太が吐き捨てるように言った。同時に周囲からどっと笑い声が上がった。見ると下級生まで笑っている。荒川は思わず泣きそうになり、走りながら奥歯を思い切りかみしめた。

「もういいだろ。やめろよ」

そう口を出したのは健太郎だった。

「うるせえんだよ、チビ」

「荒川、もうかまうことないよ。ほら早く練習に戻ろう」

「うん」

荒川はボールを追うのをやめ、健太郎についていこうとした。

「てめえ、犬のくせに勝手なことすんじゃねえ！」

亮太は荒川に向かって思い切りボールを投げつけた。ボールは荒川の背中に命中した。荒川はうっ、とうめき声を上げ、そのままそこにへたるように座り込んだ。泣いたんだ、ということが誰の目にもわかった。

亮太はその辺に落ちていたボールをつかみ、またそれを投げようと腕を上げた。

「やめろ、りよっち！」

悟が慌てて亮太に飛びかかり、押さえつける。

「あいつ、さすがにやりすぎじゃねえか」

「だよな……」

「限度ってもんがあんだろ」

卓也たちの声だ。さっきまで一緒になってギャアギャア笑ってたくせに。すぐに裏切りやがって。だから人間なんか誰も信じられないんだよ。誰も誰も誰も！

「いてえな、離せよ」

亮太は悟を突き飛ばし、校門の方向に走り出した。

できることならこのまま誰も知らないところまで走って行きたかった。

五月。街のあちらこちらに赤や白、ピンク色のつつじの花が目につく季節になった。もう通り過ぎる風に冷たさは微塵も感じられない。春というより、初夏と言ってもいいほどの陽気がここ数日続いている。全国の中学生たちにとっては、最後の大会、中学総体出場に向けていよいよカウントダウンが始まった。つつ中野球部もちろん例外ではない。そしてその先には引退の二文字がまだぼんやりとだが確実に健太郎たち三年生を待ちかまえているのだ。

放課後。あと数回に限られてきた部活が始まるのを、夕日に照らされながら待っているつつ中グラウンドに、

「うわあ！」

いきなり荒川の裏返った声が響いた。

「どうしたの？」

隣にいた曾根が驚いて顔を上げる。

「グローブが・・・」

見ると、荒川の新品のグローブがずたずたに切り込まれている。カッターで何度も切りつけたような傷がいくつもつき、ところどころ皮がめくれ上がっている。

「うわっひっでえな、これ」

「誰がこんなこと・・・」

荒川は既に泣きそうになっている。この騒ぎにちょうどグラウンドに来た前田や弘毅、つつかたちも近寄ってきた。

「ひでえ」

「もう使えねえじゃん、これ」

「どうしよう。お父さんに怒られる・・・」

荒川は、まるで獲物を逃がして落ち込む熊のように大きな体をすぼめた。

「朝は何ともなかったのか？」

前田が冷静に聞く。

「当たり前だよ。昨日お父さんに手入れくらいしろって言われて、ワックスかけたんだから」

「じゃあ今日学校で誰かがおまえのカバンからこれを盗んでやったってことだよな。で、また見つからないようにカバンに戻したんだ」

「誰かって？」

「そりゃあ・・・なあ」

「うん、そうだよな」

前田と弘毅が何となく意味ありげに顔を見合わせる。

「お前ら何やってんの」

着替えを終えて部室から出て来た卓也と和久井たちが顔を出す。少し遅れて悟も来た。

「ひどいな・・・」

荒川のグローブを見るなり悟が息を飲む。

「こんなことやるのはあいつだな」

卓也だ。

「あいつって」

「決まってんべ」

「りよっち！」

和久井がおどけて卓也の胸をピストルで撃つ真似をしながら叫んだ。

それはおそらくそこにいる誰もが内心ひそかに思っているが、口には出せないでいた名前だった。それをあらわすように、その場の空気が一瞬凍りついたように静まった。

「あれっ？　なんか俺ヤバかった？　今」

和久井が目をきよろきよろとさせる。

「空気よめよ、バーカ」

さすがに卓也が和久井の後頭部をかるくこづいた。

「わりい、わりい。で、りよっちは？」

「そういえば部室にもいなかったな」

「悟、なんか聞いている？」

「いや、特に」

悟が首を振る。

「さっきあいつが帰ってくるの見たよ、俺」

「そういえばなんか用事があるとか言ってたな」

「りよっちが部活休むなんて珍しいじゃん」

「決まりだな」

誰かが言った。それが合図のように今までとは明らかに違う空気が周囲に流れた。

荒川のグローブが誰かにボロボロにされた――。それが亮太のしわざであるという流れになるのは、ある意味自然なことだったのかもしれない。

「とにかくあいつやり過ぎなんだよな」

「あいつのグローブってさ、小学校の頃から使ってるやつでもうボロボロじゃん。だから頭にきてやったんだよ、たぶん」

「腹いせってやつね」

「いや、八つ当たり？」

「てか、嫉妬？」

「あいつんちビンボーだからな」

「よーし、みんなで問い詰めてやろうぜ」

一度亮太の名前が出ると堰を切ったようにみんな好き勝手なことを言い始める。

「ちょっと待ってよ」

健太郎が流れをせき止めるように言葉を投げた。

「何だよ、うるせえな」

卓也が健太郎をにらみつける。

「てめえ、りよっちがやったんじゃないとか言うなよ」

「いや。きつとりよっちじゃないよ」

「何でそう言い切れるわけ？」

聞いてきたのは悟だった。

「いや・・・」

言葉に詰まりはしたものの、健太郎には確信があった。りよっちがこんなことをするはずがない。絶対にりよっちじゃない。

あれは先週の日曜日。グラウンドの都合で部活が珍しく休みになったので、健太郎は町の散策に出かけることにした。まだ行ったことのない本屋も覗いてみたかったし、つかかからいいソフトが揃っていると聞いていた店にも行ってみたい。それに自転車で気の向くまま町を走るのは健太郎のひそかな趣味でもあった。

あの日は天気良かったこともあり、少し遠くまで足をのぼすつもりで家を出た。まずいつもの通学路を走り、学校を通り過ぎる。少し行くと鉄道会社の敷地に沿って陸橋が架けられている。健太郎はその大通りを避け、わざと裏道にと入った。周囲がとたんに知らない町並みに変わる。来たことのない、初めての道を思い切り飛ばすのは何とも言えない爽快感だ。

小さな十字路に出る。交差する道沿いに駐車場に挟まれるように古いアパートが建っている。その階段の下に誰かが座っている。見覚えのある背中。――亮太だった。健太郎はペダルを漕ぐ足を止めた。

亮太の手先が見えた。何をしているんだろう。よく見ると亮太はそこでどうやらグローブの手入れをしているらしかった。健太郎がいるのにも気付かず、熱心に磨いている。その姿はいつもの亮太とは何だか別人のようで健太郎は結局声をかけずに帰ってきたのだった。

亮太のグローブは確かに大分年季が入っている。荒川にひどく当たったのもその辺が原因なのかもしれない。でも――あの時の様子を見る限り、亮太は自分のグローブを本当に大切にしていた。まるで大事な宝物を慈しむかのように扱っていた。そんな亮太がたとえ他人のものとはいえ、野球の道具をこんなふうにできるわけがない。これをやったのは絶対に亮太ではない。しかし・・・。

「おい、どうした」

悟がいぶかしげに言う。

「・・・」

健太郎は黙り込んだ。あの時の亮太の様子を話したいのはやまやまだが、そんなことをみんなの前で言われるのはきっと亮太の本意ではない。あいつはきっとそういう類のことを一番嫌うはずだ・・・。

「おまえ、何も言えねえんなら引っ込んでろ」

卓也が健太郎を押す。健太郎はよろけながらくちびるを噛んだ。

半歩ほど先を荒川ががつくりと肩を落しながら歩いている。まるでしょぼくれた熊みたいだなと思いながら、  
「あんまり気にすんなよ。荒川」

曾根は慰めるつもりで声をかけた。荒川の反応はない。いつもなら帰り道は部活中より元気なのに。今日はお通夜のようだ。まあ仕方がないといえば仕方がないが。荒川がこの調子ではいつものようにバカを言う気にもなれず、曾根は自分も一緒に肩を落としながら黙々と歩いた。

それにしても何てヤツなんだろう。人のグローブをあんなにするなんて。転校生は、りよっちじゃないとか言ってかばってたけどありえない。あんなことをするのは絶対に亮太しかいない。何が気に食わないのか知らないけど、いつも人を睨みつけてるし。大体偉そうなんだよ。少しばかり野球がうまいからって何様のつもりなんだ。性格が悪すぎる。曾根は普段本人の前では死んでも口にできないことを心の中でこれでもかというほど並べ立てた。

あいつが犯人だ。決定！

曾根の家がある団地が見えてきた。曾根はふう、と息を吐いた。今日はいつもの倍時間がかかったような気がする。荒川は相変わらず黙ったままだ。買ってもらったばかりのグローブをボロボロにされたショックと、親になんて言えばいいのか、そんなことで頭がいつぱいなのだろう。

でも・・・と、曾根はその大きな岩みみたいな背中を見ながら思う。

おまえも悪いんだよ。あんなにみんなの前でこれみよがしに自慢するからさ。あれじゃあ、亮太に目をつけられても仕方ないよ。気の毒だけど。その目をつけられたのがとりあえず自分じゃない。よかったと思ってしまう自分を、曾根は自覚せざるを得なかった。

ゆるい坂を上がって団地の敷地内に入る。荒川の家はここからもう少し先に行ったところだ。いつもなら団地の下にあるベンチで荷物を下ろし、ひとしきりバカ話をしてから別れるのだが、今日はお互いそんな気分でもない。荒川も足を止めようとはしなかった。

「じゃあな、荒川。元気出せよ」

そう声をかけると、

「うん」

荒川は弱々しい声で言い、振り向きもせず歩いていく。曾根は荒川が心配のような、それでいて何となくいまましいような変な気持ちで、のっそりとした後ろ姿を少し見送ってから「ただいま」団地の一階にある自宅のドアを開けた。

とたんに香ばしい匂いが鼻腔を刺激する。今日はギョーザだな。そう思った瞬間荒川のことはすっかり頭から消えてしまった。

「あー腹減ったあ」

曾根はやたらと重いカバンを玄関にたたきつけるように置き、そのまま家の中に上がろうとスパイクの紐に手をかけた。と、

「一世、汚れ物はちゃんと出しときなさいよ」

絶妙のタイミングで奥から母親の声が飛んでくる。

「はいはい」

曾根は仕方なく、腰を曲げてカバンのファスナーを開ける。そして、丸めたワイシャツや体操着などを無造作に取り出した。あーあめんどくさいな。

「なんだ？これ」

ふと曾根の手が止まった。汚れ物の間から出て来たのは本来そんなところにあるはずのないものだった――。

「本当なの？」

思わず大きな声を出してしまい由美子は慌てて受話器を持ち替えた。

「ひどいわね、それは」

「ええ、曾根くんのお母さん泣いてたわ」

電話の相手であるつかのお母さんが電話口でため息をつく。彼女の話によると曾根君のカバンの中からなんと香典袋が出て来たというのだ。しかもその表書きにはご丁寧に「野球部一同」と書かれていたらしい。

「一体誰がそんなこと・・・」

「犯人はまだわからないけど、野球部の誰かであることは間違いないと思うわ」

「野球部・・・」

「ひどいわよね。これはただのいたずらじゃすまないわよ」

「そうね。いたずらにしては私も度を越えてると思う」

「それと聞いた？荒川君のグローブも、誰かにボロボロにされたっていう話よ。それも新品」

「・・・野球部大丈夫かしら」

由美子は心底そう思った。健太郎は家では何も言わないが、一体野球部内で今何が起きているのか。

「だから私ね、曾根さんに言ったの。学校に訴えた方がいいって。この前は何とか抑えたけど今回のことは部活内だけの問題じゃ済まないもの」

「そうね・・・」

「総体を控えた時期だし、私もできれば大事にはしたくないと思うけどそんなことも言ってもらえないでしょう。こうした嫌がらせがエスカレートしても困るし。仕方ないわよねえ」

つかのお母さんが不自然に語尾を上げる。暗に由美子に同意を求めているのがわかった。

「ええ、仕方ないわよ」

彼女の気持ちに沿うように答えながら由美子はふと考える。

健太郎たち三年生にとっては中学校最後の総体。今回のことが公になることで野球部の子たちにとって何か良くないことが起こるのだろうか。そうなのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。いくら想像してみたところでこれ以上のことは由美子にはわかる由もなかった。

「かわいそうに曾根君ずっと震えてるんですってよ。お父さんもたちが悪過ぎるってかなり怒っていらして」

「それはそうでしょうね」

由美子は切なくなってきた。自分の子供のカバンに香典袋が入れられていたなんて。親だったら誰だって怒りたくもなる。

「戸田さんには本当に申し訳なくて。転校してきた早々こんなこと・・・ごめんなさいね」

「そんな・・・」

気にしないで、と言いかけて由美子はいつこの前も彼女に同じセリフを言われたことを思い出して少しおかしくなった。電話を切り、キッチンに戻る。由美子はおもむろに流しに立ち、洗い物を始めた。このところ薬のせいか体調があまりよくない。本当はすぐにも休みたいのだが、その前に少し頭の中を整理したかった。そういう時はただ座り込んでいるより手を動かしている方がいい。

水を流しながら横目で健太郎を見る。

「嘘だろ、ありえねー」

テレビを見てバカ笑いしている様子を見る限りいつもと特に変わったところはない。

由美子は健太郎に今の件を話していいものかどうか迷っていた。健太郎ははたしてどこまで知っているのか。それともまだ何も知らないのか。

何度か心の中で逡巡したあと、とりあえず今日のところは伏せておくことにした。はっきりしたことがわからないうちは何を言っても推測にしかならない。それならば今はまだ親が余計なことをみだりに口にすべきではない。そう思ったのだ。

しかしせっかく由美子が判断したかいもなく、この件は一晩のうちに野球部全員に知れ渡ることとなった――

。

「おはよう。とだけん」

校門を入ったところで、つっかに肩を叩かれた。

「おはよ」

「昨日メール見た？」

ま、当然その話題になるよな。健太郎は昨夜回ってきたメールの内容を頭の中で思い返した。

『曾根のカバンの中に葬式で使う袋が入ってたらしい。それに野球部一同って書いてたんだって。荒川から今メールきた。なんかやばくね？一応アド知ってるヤツに送ります。あと適当に回しといて』  
差出人は秀樹だった。

「びっくりだよね」

「うん」

「誰がやったと思う？」

「わかんないよ」

「荒川のグローブの犯人と同じヤツだよね」

「どうかなあ」

前を見ると花壇の脇にデブコンビが立っている。曾根と荒川だ。健太郎とつっかは互いに顔を見合わせ、急いで二人に駆け寄った。

「おい、曾根！」

声をかけると曾根は二人をおびえたような目で一瞥し、逃げるように歩き出した。

「おいどうしたんだよ」

「あのさ、野球部は誰も信用できないんだって」

荒川が代わって言う。

「荒川！よけいなこと言うなってば」

「だってそう言ってたじゃん」

「何だよ。信用できないって」

「だから昨日・・・」

荒川が言いにくそうに口ごもる。

「ああ・・・」

あれか。『野球部一同』。健太郎は改めて、曾根のカバンに入っていたという香典袋を想像した。確かに曾根の気持ちもわかる。疑心暗鬼になるのも当然かもしれない。

「ニヤニヤしてんじゃねえよ」

曾根が荒川に向かって声を荒げる。

「えっ、ニヤニヤなんかしてないよ」

そう言いながら明らかに口元を緩めている荒川を曾根はにらみつけた。

どうもしゃくにさわる。昨日は今にも死にそうに落ち込んでたくせにターゲットが自分からこっちに移ったとたん急に元気になりやがって。口では気にするなよ、なんていかにも心配してそんなこと言

ったって、嬉しそうなのがみえみえなんだよ。

「なあ、曾根・・・」

健太郎がもう一度曾根に声をかけたのと同時に、誰かの携帯の着信音が鳴った。

「あ、俺」

曾根がブレザーのポケットをまさぐる。こんな時間にメールなんて誰だろう。携帯を開けると見たことのないアドレスの文字が並んでいる。友達じゃない。いたずらメールか？

曾根はいぶかしく思いながらメールを開いた。と、その曾根の顔色が見る見る青ざめていく。健太郎たちは思わず無言のまま顔を見合わせた。

「どうしたの？」

横から曾根の携帯を覗き込んだ荒川が「ああっ」と大声を上げた。

「何だよ、荒川」

「これ・・・」

荒川が曾根の手からもぎとった携帯を健太郎とつつかの前に突き出した。

見ると画面一杯に「死ね死ね死ね・・・」と打ち込まれている。

「げっ。ひでえ」

つつかが低くうなった。

「誰だよ、こんな——」

健太郎がそのメールをもっとよく確認しようと身を乗り出すと、

「返せよ！」

曾根が携帯を荒川から引きはがすように取り返し、玄関に向かって走り出した。健太郎たちも慌てて後を追う。

曾根が自分の靴箱の前で立ち尽くしている。

「曾根？」

さっきよりも増して顔が蒼白になっている。

「どうかしたのか」

健太郎がもう一度声をかけると、曾根の手から紙切れがはらりと落ちた。それを健太郎が拾う。見るとそこには目も当てられないほどのひどい言葉が書き連ねてあった。

「死ねよ」「バカ」「キモイんだよ」「下手くそ」「顔見せんな」「足手まとい」「野球部やめろ」「みんな迷惑してんだよ」「野球部のクズ」・・・

健太郎は思わず絶句した。一体誰がこんな・・・。曾根が下を向いたまま唇を噛みしめている。何か言ってやらずにちやと焦るが、とっさに言葉が出てこない。

「何？それ」

紙を見たつつかと荒川も息を飲む。

「あのさ、曾根、こんなこと誰も思っていないから」

やっとの思いでそう声をかけると、曾根は健太郎から紙を取り上げ、それをぐちゃぐちゃに丸め、床に投げ捨

てた。そして、

「うわーっ」

奇声を上げながら校門の方に走り出しそのまま学校を出て行ってしまった。校庭にいた下級生たちが何事かと振り返る。

「待てよ、曾根！」

健太郎が曾根の後を追いかけようと走り出した時、ちょうど始業を告げるチャイムが鳴った。

「ねえねえ、とだけん」

休み時間のベルが鳴ると同時につっかが飛んできた。

「曾根くんのあれってさ、やっぱり野球部のやつがやったのかな」

「そうかもね」

健太郎は立ち上がりながら答えた。そうであってほしくはないが野球部以外のやつがわざわざあんなことをしてもあまりメリットはないような気がする。もちろん野球部にとってもメリットがあるわけではないのだが……。

間違いなく野球部の誰かだろう。

それより今は曾根のことが気になる。あのまま家に帰ってしまったのだろうか。いや、もしかしたら学校に戻っているかも――。

「百パーそうだよね」

「たぶんね。――ねえ、曾根って何組だっけ？」

「三組だけど、なんで？」

「俺ちょっと見てくる」

健太郎が教室を出ると、ちょうどこっちに向かってきた悟とぶつかりそうになった。

「あ、ごめん」

ふと悟の胸に付いている名札が目に入った。三組とある。そうか、こいつも三組だっけ。

「あのさ、今日曾根、来てる？」

「いや、来てない」

「そうか」

今朝のことを悟には話しておいた方がいいか、健太郎が迷っていると、悟が先に口を開いた。

「今日昼休みに一階の空き教室に集まってくれないか」

「えっ、何で？」

「野球部の三年全員で話し合いをしたいんだ」

「昨日のことか？」

健太郎はストレートに聞いた。昨日のメールは当然悟にも回っているだろう。

「まあな」

悟は、少し間を置いてからそう答えた。

「一応みんなに声かけるけど、もし聞いてないやつがいたら伝えといて」

「わかった」

話し合いか――。健太郎は出かかっていた言葉を飲み込み、うなずいた。

確かに一度みんなでちゃんと話し合った方がいい。今野球部の中で何かが起こっている。きっと部に対して何らかの不満を持っている者がいるのだろう。

この機会にみんな腹の中で思っていることを言い合ってすっきりすればいいのだ。

昼休み。健太郎は早めに給食を食べ終え、つっかと一緒に一階に下りた。運の悪いことに当番に当たっていて代わってくれるやつを探すのに少し手間取った。それでも何とか急いだつもりだったが大半の者がもう集まっていた。すでに人数分の椅子が部屋の中央に並べられている。

「ごめん、遅くなって」

健太郎たちに続いて残りの者も入ってきた。

「みんな適当に座ってくれ」

悟の声掛けにみんな椅子に腰を下ろす。

（あれ、りよっちがいない）

健太郎はそれに気付いたがとりあえず近くの椅子に座った。

「貴重な昼休みに悪かったな」

悟が早速口を開く。

「時間もないから単刀直入に言う。みんなも感じてると思うけど最近部活内がゴタゴタしているよな気がするんだ。昨日のこともそうだし――」

「犯人探しってことか」

和久井がそっぽを向いたまま言う。

「いや。そんなつもりはない。そんなことはしないよ。ただ俺たち今までこんなふうにみんなが集まって話したこととかなかっただろ。だからさ、何か言いたいことがあるやつがいたらこの際ぶちまけてほしいんだ」

悟はそこで一度言葉を切り、続けた。

「総体も控えてるし、このままじゃ俺らだめだと思う」

隣同士顔を見合わせている者、下を向いている者、誰も口火を切らない。

「何でもいいんだ。何かあるだろ」

健太郎は思い切って手を上げた。

「いいかな」

悟がホッとしたように健太郎を見る。

「じゃあ戸田」

健太郎は立ち上がった。そして大きく息を吸ってから話し始めた。

「転校してきたばかりの俺が意見を言うなんてさしでがましいかもしれないけど……。でも転校生だからこそ、かえってみんなより客観的に野球部を見ることができるとも思うんだ」

「だから何だってんだよ」

和久井がいらついた声を上げる。

「戸田。はっきり言っていていいぞ」

悟が先を促す。

「うん、じゃあ率直な意見を言うよ。俺から見ると、レギュラーとそうじゃないやつらとの間がちょっとぎくしゃくしすぎてると思う。普段の練習場所も違うとか、同級生なのに急に遠慮したりとかそういうのは俺はおかしいと思う」

「あのな、部活ってのは実力社会なんだよ」

今度は卓也だ。

「そんなの変だよ、みんな同じ野球部員だろ」

そう言ってから健太郎はとっさに（まずい）と思った。つい相手につられて語気を強めてしまった。

「下手くそなくせに野球やってるほうが悪いんだよ。どうせおまえらなんか大して役にも立たないんだからさ」  
すぐに、まずいと思ったことを後悔した。こいつにはやっぱり怒鳴りつけてやるくらいでちょうどいいんだ。

健太郎は体ごと卓也に向き合った。

「おい、もう一度――」

言ってみろ、の言葉にかぶせるように、

「卓也、言い過ぎだぞ」

悟がとりなす。さすがに自分でもそう思ったのだろう。卓也は健太郎から視線を外し、椅子に座り直すとだらしなく足を投げ出した。

「大体部長が悪いんじゃないの」

圭吾だった。圭吾は副部長だ。

「俺のせいかな」

悟が圭吾の方を向く。

「部長がうまく部をまとめられないってことだろ」

周囲に張り詰めた空気が流れた。誰も言葉を発しない。いや、発せない。

その空気を断ち切るように悟が言った。

「俺が部長の器じゃないってみんなが言うんだったら俺は部長やめてもいいよ」

「へえ、逃げんのかよ」

圭吾だ。

「圭吾。おまえがやればいいじゃん。おまえもともと部長になりたくて仕方なかったんだろ」

悟の挑発するような口調に、すごい形相で圭吾が立ち上がった。

「おい、ふざけんなよ」

「悪かったな。おまえがやりたかったのに、俺が部長になっちゃってよ」

「だからおまえが部長なんだよ。何とかしろよ」

「もう俺はいいよ。部長をやめさせてほしいって先生に言ってくる」

「ふーん、昔から逃げるのはおまえの特技だもんな」

「どういう意味だよ」

「そういう意味だよ」

「言いたいことがあるならはっきり言え」

二人は睨み合った。

悟がここまで言い合うのは珍しい。健太郎は必死で場を治める言葉を探すがどうもうまくいかない。

「あ、あのさ・・・」

ようやく口を開いたのは俊太郎だった。底抜けに明るい彼は、小柄な体格のせいもあり、ギャングエイジの小学生をそのまま中学三年生にしたような男だった。こんな時は彼のキャラクターがいい。

「それよかさ、荒川のグローブとか曾根のカバンに香典袋入れた犯人を捜すのが先じゃね？」

「そ、そうだよ」

「あと少しで総体なのにさ、一体誰だよ」

周囲も救われた思いで俊太郎の言葉に飛びつく。この大事な時期に部長と副部長の言い争いはシャレにならない。

「だからりよっちだろ」

「あれっ、そういえばあいつは？」

「休みだってさ」

「怪しすぎんだろ」

「決まったな」

またか……。健太郎が思わず身を乗り出した時教室の前の戸がガラッと開いた。みんな一斉に顔を向ける。

「お前らこんなところで何やってんだ」

顧問の山下だ。悟が慌てて立ち上がる。

「いや、ちょっと総体に向けてみんなで話し合いを――」

「話し合い？何だ、何かあったのか」

「まあ……」

「言えないようなことか」

「あ、いや、そんなことはないです」

悟は言いよどんだ。今、一連のことを山下に知られるわけにはいかない。事がわかれば、きっと総体は出場禁止にするとか言い出すに決まっている。

「そうか」

山下はさも、うさんくさ気な目つきで全体をみまわしてから言った。

「まあいい。――おい、卓也」

「は？」

いきなり名前を呼ばれた卓也が、首だけを斜め後方に向けた。

「おまえちょっと職員室に來い」

「何ですか」

「今職員室に曾根のご両親が來てる」

曾根の両親――。一気にざわめきが起きる。卓也もさすがに体を起こした。

「ほら早く來い」

「何で俺が？」

「ご両親がおまえを呼んでるんだ」

「関係ないすよ」

「いいからとにかく來い。俺を困らせるな」

山下が卓也に近付き、腕をつかむ。卓也は舌打ちをし、山下の手を払い、観念したように立ち上がった。

二人が出て行くと、室内はさっきまでのお通夜みたいな雰囲気とは打って変わって騒然となった。皆口々に勝手なことを言い始める。

「何だろう。曾根の親が來てるって」

「例のことだろ。クレーム付けに來たんだよ」

「あいつ、親にチクツたのか」

「まあ仕方ないだろうな。曾根だし」

「でも何で卓也が呼ばれるんだ？」

「名指しだったよな」

「卓也がやったってことか」

悟は唇を噛んだ。中学最後の総体のために、何とか部をまとめ上げたくてこの場を設けたのに、妙なことになってしまった。それにあの様子では山下にも今回のことはもうバレているらしい。総体はどうなるんだろう――。

「俺、ちょっと見てくるわ」

和久井が立ち上がった。

「俺も行く！」

すかさず俊太郎も後を追う。しかし二人とも五分とたたないうちに戻ってきた。

「だめだ、戸が閉まっていてわかんねえ」

そうだろうな、と健太郎は思った。まさか外から見えるような状態で話をしているはずもない。それにしても卓也が呼ばれたのはなぜなのか……。

昼休み終了のチャイムが鳴った。

野球部の三年生たちは釈然としない思いを抱きながらそれぞれの教室に戻る事となった。

卓也が山下の後ろに続いて職員室に入ると、事務室に続くドアの向こうに、曾根の両親が座っているのが見えた。

「入れ」

山下はドアの前で一旦立ち止まり、卓也の肩を軽く押した。

「あのさ、もう授業始まったんじゃないの」

「今日はいい。担任の先生には許可をとってある」

「・・・」

卓也は渋々その事務室へ体を入れた。一体なんだって俺がこんなところに呼び出されなきゃなんないんだ。

「座れ」

卓也は山下に促され、曾根の両親と向き合う形で腰を下ろした。

「卓也。昨日曾根のカバンに香典袋が入れられていたのは知ってるな」

卓也は無言のまま頷いた。

「これを見ろ」

卓也の目の前に紙が出された。ノートを切り取った紙に「キモ」「死ね」などの悪口がびっしりと書いてある

。

「これが今朝曾根のお宅のポストに入っていたそうだ」

「へえ。だから？」

「これだけじゃない。靴箱にもこれと同じような紙が入っていたらしい」

「だから何だよ」

「おまえがやったんじゃないのか」

その山下の言葉に卓也はこめかみの辺りの血管がプチプチと音を立てたのがわかった。

「何で俺がそんなことするんだよ、知らねえよ」

「でも君、今朝うちの前を通っただろう？」

曾根の父親が身を乗り出してきた。それを受けて母親も、

「ゴミ出しの時見かけたの。あなたの家はうちの団地とは反対方向のはずなのに、おかしいなと思ったのよ」

それは・・・と言いかけて卓也は思わず口ごもった。今朝わざわざ遠回りをして登校したのは、同じクラスの安藤佳世と待ち合わせしていたからだ。しかし今ここでそれを言うのはちょっとまずい。実は佳世は和久井の彼女なのだ。もしかしたら今後自分と付き合うことになるかもしれないが、今は微妙な段階で何とも言えない。どうして佳世と会っていたのかと聞かれたら何とも答えようがない。卓也は必然的に黙り込んだ。

「君がうちの一世にあまりいい感情を持っていないことはわかってるんだ。小学校の頃から君とはいろいろあったもんな」

卓也は言葉を無理矢理押し込んだ代わりに曾根の親父をにらみ付けた。小学校の頃だって？どんだけ大昔の話をしてんだよ。

「でもこんなやり方はスポーツマンらしくないんじゃないか」

「俺じゃないって！」

「おまえがちゃんと認めて曾根に謝罪するなら、ご両親は今回のことは許すとおっしゃっている」

「いや、俺じゃないから」

「野球部が総体に出られなくなってもいいのか」

山下が威圧感丸出しでそう言った瞬間、目の前で曾根の親父が口角を片方だけ上げてさも意地悪そうに笑ったのが見えた。卓也はテーブルの下で拳を握りしめた。

(この野郎——)

確かに小学校の頃よくあいつをいじめていた。当時も同じ野球チームに入っていたが、どへたのくせにこのバカ親父がしょっちゅうでしゃばってきてうざかったからだ。見学にくるたびに、監督をつかまえては何だかんだと文句を言っていた。何でうちの息子がレギュラーじゃないんだの、誰々は態度が悪いから注意した方がいいだのウダウダ言いやがって。息子に集団スポーツをさせているくせに、自分の息子以外はどうでもいいというのがあからさまで最悪だった。監督も立場上父兄に気をつかっていたのか、何を言われてもハイハイ言うだけでそれをいいことに曾根も何かあればすぐ親父に言いつけた。そのたびに親父がしゃしゃり出てきて本当にウザかった。

さすがに中学校になれば親の口出しもなくなるだろうと思ってたら、またこれかよ。

「俺は何もやってません」

卓也は曾根の両親と山下を交互に見ながらはっきりとそう言い切った。

「じゃあ誰がやったんだ」

「だから知らねえよ」

「犯人は必ずいるんだぞ」

「亮太じゃないスカ」

「久慈が？証拠はあるのか」

「俺がやったっていう証拠だってねえじゃねえか」

「じゃあ何で今日に限って曾根の家の方をうろついてたりしたんだ」

「だからそれは……」

卓也はどうしようもなくイラついてきて、ついこの前ストパーをかけたばかりの髪の毛を荒々しくかき上げた。

佳世と会っていたことは口が裂けても言えない。

「先生。こんな部が総体に出ることは私はおかしいと思いますね」

山下と卓也のやり取りを聞いていた曾根の父親が、体を椅子の背もたれに戻しながらゆっくりとした口調で言った。そうだ、昔チームの監督に文句を言っていた時も確かこんな口調だった。胸くそが悪いというのはこういう気持ちのことだったのか。卓也は妙に納得する思いだった。

「いや、曾根さん、ちょっと待って下さいよ——」

「待って下さいも何もうちの一世は今回のことで傷付いているんですよ、先生」

「そうですよ、今朝だって学校に行ったと思ったらすぐに泣きながら帰ってきて。もう私びっくりしてしまっ……今だってあの子を家に残して来ていますけど本当はそばにいてやらないと心配なんです」

ゴマフアザラシみたいな体型の母親がハンカチで目を押さえる。卓也はアザラシから目をそらした。曾根が自殺でもするっていうのだろうか。キモだの死ねだの言われたくらいでいちいち死んでたら中学生なんかやってられねーし。大体何個命があっただって足りないだろ。

「とにかく今日これからでもこの件を教育委員会に報告して、野球部の総体出場を停止するよう要望してきます。父兄としてこんな陰湿なことをする部員のいる部が何もなかったように総体に出るのはどうしても許せません

ので」

「あの、卓也——いや、佐々木もですね、充分反省していると思うんですが」  
山下が手のひらで首筋の汗をぬぐいながら言う。

「反省？この子がですか」

父親が卓也を横目で見ると、嫌な目付きだ。卓也は自分に向けられた視線を真正面から受け止める。

「——まあそうですね。うちとしましても、こちらにはわが子がお世話になっているわけですから、できれば最後の総体には出してやりたいと思っています。ですから先程からお話しているようにこの佐々木君がきちんと自分がやったと罪を認めて謝罪するなら穏便に済ませてもいいわけですよ」

「ありがとうございます。ほら謝るんだ、卓也」

山下が卓也の頭を抑えようと手を伸ばしてきた。

「ふざけんなよ！」

卓也はその腕を払いのけた。その衝撃でテーブルの隅に積まれていた紙の束がバサバサッと下に落ちる。今までも親や教師に頭に来ることは何度もあった。しかしこれほど怒りを覚えたのは初めてだった。

この日の放課後。

——確かこの辺だったっけ・・・

健太郎は制服のままで、亮太のアパート近くの道を自転車で走り回っていた。この前はたまたま通りかかっただけなので、アパートの場所がいまいちわからない。しかし何となく見覚えのある建物がある。この近くであることは間違いなさそうだ。

今日はあれから大変だった。怒り狂いながら職員室から戻ってきた卓也が、教室に入るなり掃除道具の入ったロッカーを持ち上げ、窓から投げ落としたのだ。たまたま下に誰もいなかったからいいが、もしそこを人が歩いていたりでもしたら大惨事だった。同じクラスの圭吾と柔道部のヤツが二人がかりで止めなければ次は人間でも投げ落としそうな勢いだったらしい。

「俺じゃねえ！あれはりよっちがやったんだ。今日学校休んでるのが証拠だろ」

卓也の叫ぶ声が廊下にいた健太郎にも聞こえた。確かにあの堂々とした性格の卓也が悪口を書いた紙をこっそり相手の家のポストや靴箱に入れたりするとはとても思えない。そんなことをする暇があれば、卓也なら相手をぶん殴りに行くだろう。もちろんそれがいいというわけではないが卓也ならたぶんそうするはずだ。かといって卓也の主張するように、一連のことをりよっちがやったとは、健太郎にはどうしても思えなかった。

—あ、あれだ！

何度も横道を通り抜け、やっと見覚えのあるアパートが見つかった。健太郎はその少し手前で自転車を止めた。

今日亮太が学校を休んだのが気になって、部活を休んでここまで来てみた方がいいがいざとなると訪ねてみる勇気が出ない。

——学校を一日休んだくらいでいちいち家に来られたりしたらきっと迷惑だろうな。もし俺がりよっちだったら絶対ウザい。

そう思うとやっぱり躊躇してしまう。

——このまま帰ろうか。一応来てはみたんだし。

そう思った時だ。アパートの二階のドアがいきなり開いて中から亮太が飛び出してきた。まるで筋トレをしている時のような勢いで階段を駆け下りてくる。すぐにドアの影から髪を金髪に染めたおばさんが顔を出した。

「二度と帰ってくるんじゃねえぞ！」

亮太に向かって大声で怒鳴り、乱暴にドアを閉める。

—何だあれ。りよっちの母ちゃんか？

健太郎が呆気にとられているうちに亮太の姿が見えなくなった。

健太郎は慌てて自転車を走らせた。

亮太は全力疾走で道を走った。すれ違う人が皆変なものでも見るような目でこっちを見ていく。

ちくしょう。

息がきつい。でも今足を止めたら一気に泣いてしまいそうで亮太はただ闇雲に走り続けた。

全部全部あいつのせいだ！ あいつの！

——昨日の夕方。部活をサボって家に帰ると、家の中に母親と知らない男がいた。化粧をしている母親のそばで男が寝そべてテレビを見ている。

「あら、あんたもう帰って来たの」

母親がパフを額に当てたまま、驚いた顔で亮太を見た。男も素早く体を起こす。二人とも、思いがけず亮太が早く帰ってきたので、慌てているのが明らかだった。

——誰だこいつ？

亮太は母親のことはとりあえず無視して、男に視線を向けた。頭が禿げ上がってテカテカに光っている。

——げっ。キモいハゲジジイ。

そのハゲジジイは黄色い歯を見せて亮太に笑いかけてきた。

「はじめまして。君が亮太君だな」

「葛西さんよ。ほらボサツとしてないで挨拶しなさい」

無言で立ったままにいる亮太に智恵子がすかさず挨拶を促す。が、亮太はそれを無視して自分の部屋に行った。

「ごめんなさいね。愛想のない子で」

母親の取りつくろうような声が聞こえてくる。

「いやいや、突然でびっくりしたんだろう」

「でも、いつもあんな調子なんだから」

「男の子ってのはそんなものだよ」

各部屋が襖で仕切られただけの狭い家の中では嫌でも二人の会話が耳に入ってくる。亮太は胸がムカムカしてくるのを感じた。

——何なんだ、あのハゲジジイは。

しばらくカーペットの上に寝転んでいると、智恵子が部屋に入ってきた。

「何だよ」

亮太は顔をそむけながら言った。

「あたしそろそろ仕事に出るから」

智恵子は何日か前から時々近所のスナックにアルバイトに行くようになっていた。理由はよく知らないが、保険の仕事だけではお金が足りないのだそう。

「あのハゲはまだいんのかよ」

「しっ、ハゲなんて言わないの」

智恵子は慌てて襖の方を気にしながら人差し指を口に当てた。

「あの人ね。お店のお客さんなの。もしかしたらあんたたちのお父さんになってくれるかもしれない」

「はっ？ 何だよそれ」

「とにかくそういうことだから。おかず作つといたから食べなさい」

亮太はムカムカが止まらなくなった。

あのハゲジジイがお父さんだって？ バカじゃねえか。何考えてんだあの親は。

智恵子が仕事に出た気配がした。

しばらくそのまま寝転んでいたがだんだん腹が空いてきた。

亮太は襖を開けて部屋を出た。ハゲジジイがビールを飲みながら何か食べている。

テーブルの上には智恵子の作った煮物などが並べてあった。いつもは子供のタメシなんか気にもしないくせにこのハゲのためには作るのか。そう思うとまたムカムカが増してきた。

「おい」

いきなりハゲが声をかけてきた。振り向くとその目がすわっている。かなり酒に酔っているようだ。

「何だ、その生意気な目付きは」

さっきとは口調まで変わっている。

「おまえの母ちゃんはな、俺にベタぼれなんだとき。どうしても結婚してくれってうるさいんだよ」ハゲはろれつの回らない舌で話し始めた。亮太の中で何かが大きくふくらんでいった。

「子供よりも俺の方が大事ときたもんだ。俺と一緒にになれるなら子供なんか捨ててもいいっていうんだから困ったもんだねえ」

そして、そのふくらんだ何かが思い切り音を立ててはじけた。

何が何だかわからないうちに気が付くと亮太は男を殴っていた。

「ふざけんな、このハゲ！」

「何をやる、このクソガキが」

男も殴りかかってくる。しかし所詮相手は酔っ払いのオヤジだ。力は亮太の方が断然強い。

亮太が数発殴ると男はフラフラとよろけ始めた。ちょうどその時アルバイトが休憩時間に入ったらしく智恵子が家に戻ってきた。

「何やってんの！やめなさい」

二人の様子を見て智恵子が慌てて止めに入る。が、それにはかまわず亮太は更に男を殴ろうと手を上げた。

「やめろって言ってんでしょ！」

「いてっ」

亮太は頬に熱い痛みを覚えた。智恵子が亮太の頬を叩いたのだ。男は鼻血まみれになっていた。

「あんた一体この人に何をしたのっ！」

智恵子は半狂乱になって亮太につかみかかってくる。

「いてえな、やめろよ」

「何したのって言ってんのっ！」

「別に」

「こんなことしてただじゃ済まないからね。わかってんのっ！」

「うるせえ」

亮太は智恵子の手を振りほどいた。

「ごめんなさいねえ、あんた。もう何があったのよお」

智恵子は今度はおろおろしながら、戸棚を開けて救急箱を探し始めた。

亮太は部屋に戻りまた床に寝転んだ。布団を敷くのも面倒くさい。

(いてえ・・・)

気が付くと口の中がひりひりする。さっきあいつに殴られたときに切ったのだろう。

空腹は限界を越えていたがもうあの二人の顔を見るのも嫌だった。ゴロゴロしているうちに亮太はそのまま眠ってしまったらしい。

今朝目を覚ました時には、登校時間はとうに過ぎていた。みんなどこかに出かけてしまったらしく家の中には誰

もいなかった。姉のみちるの姿もない。亮太は学校はさぼることにしてそのまま部屋にいた。どうせ学校なんか行ったって仕方ないんだ……。

午後になって智恵子とあのハゲジジイが揃って帰ってきた。男は顔中にガーゼをベタベタ貼りつけている。——どんだけ大げさなんだよ。

亮太を見て母親が言った。

「あんたいたの」

「いちやわりいのかよ。ここは俺の家だろ」

「ふざけんじゃないよ。家賃払ってんのはあたしだよ。あんたなんかただの居候」

「おいおい、それは言い過ぎだろう」

男が勝ち誇ったように亮太を見て笑った。亮太はまたむかついてきた。

「いいのいいの、本当のことなんだから。それよりごめんなさいねえ、あなた」

智恵子は男に向かって甘ったるい声を出した。

「ちゃんと子供の躰はしてきたんだろね」

「そりゃそうよ。でもねえ……姉といい、この子といい、親を困らせてばかりで疲れるわ。どうしてこんな子になっちゃったのかしらねえ」

「将来何か事件を起こしたりしないだろうね」

亮太はカッとなり、男につかみかかろうとした。母親がすかさず亮太を突き飛ばした。

「この人に手を出すんじゃない！」

「そっちをかぼうのかよ。俺だって殴られてんだぞ」

亮太はまだ少し血の味が残る口をぬぐいながら言った。

「あんたが先に手を出したんじゃないの」

「ムカつくんだよ」

「だったら出て行け」

「わかったよ。出ていくよ」

そう言い捨てて家を飛び出したのはいいが行くところなんかどこにもない。こんな時テレビの学園ドラマだと必ずうまい具合に腰を下ろせる土手があったりするものだけど、あいにくこの辺りにはそんな場所はない。亮太は陸橋の下の、鉄道会社の敷地を仕切っているフェンスの前でようやく足を止めた。同時に涙がこぼれてきた。

——やべーな。

健太郎は住宅街の中を亮太を探しながら闇雲に自転車を走らせた。どこに行っちゃったんだろう。

少々焦ってきた時、緑色のフェンスのところに亮太が立っているのが目に入った。

よかった、やっと見つけた。健太郎はサドルを降り、車体を押しながら亮太に近付いていった。

「りよっち？」

背後からそう声をかけると亮太がギクツとしたように振り返った。

亮太の顔を見て、健太郎ははっと息を飲んだ。亮太の頬が濡れている——。泣いている？りよっちが？

亮太は慌てて目をこすり、逃げるように駆け出した。

「待ってよ、りよっち！」

今度こそ見失ってはいけない。健太郎は自転車に飛び乗った。

公園の隅にある水道で、水を流しっ放しにしながら亮太が顔を何度も洗う。健太郎はその少し後ろに立っていた。そうだ、ハンカチを渡そう、と思い、ポケットをまさぐってみたが、あいにく持ち合わせていなかった。

亮太はようやく水を止め、顔をブンブンと振って水滴を飛ばした。

亮太が駆け込んだこの小さな公園には、遊具といえるものは何もなかった。明らかに壊れているシーソーが置き去りにされたようにあるだけで、あとは猫のフンの臭いがする砂場があるだけだった。二人はどちらからともなく入り口の階段に腰を下ろした。

「おまえ、何しに来たんだよ」

亮太がまだ水滴の残っている顔をジャージの袖口で拭きながら言った。勝気そうな目。

いつもの亮太だ。こいつが泣いていたなんてまだ信じられない。健太郎は見てはいけないものを見てしまったような気がした。

「うん、まあちよっとね」

健太郎は言葉をにごした。おまえが今日学校休んだから気になってさ、とは何となく言えなかった。

「人んちに勝手に来んじゃねえよ」

「いや、実は今日学校でいろいろあってさ」

健太郎は荒川のグローブが壊されていたことや、曾根に香典袋や悪口メールが届いたこと、そして曾根の両親に卓也が疑われていることなど昨日からの一連の出来事を話した。亮太は黙って聞いていた。

「それは卓也がやったんじゃないか」

一通り健太郎の話聞き終わってから亮太が言った。

「あいつだったらそんなまどろっこしいことしないでぶん殴るだろ」

「そうだよね。俺もそう思うんだ」

健太郎は亮太が自分と全く同じ考えだったことに嬉しくなった。りよっちなら絶対にそう言うと思っていた。

「で？おまえ、なんでわざわざそんなこと俺に言いに来たわけ」

「いや、なんでってさ・・・」

まさか、その卓也が「りよっちがやったんだ」と騒いでいるとはさすがに言い難い。

亮太は健太郎を睨むような目を見た。

「今度は俺が犯人ってことになってるわけか」

「えっ、まさか」

健太郎は慌てた。心を読まれたのか？

「別にいいよ、それで」

亮太は正面に向き直り、投げやりにそう言った。

「よくないよ。俺はりよっちは絶対にそんなことしないって信じてる」

「は？ 何おまえ、キモイから」

「キモくてもいいよ。だからさ。これ以上学校休むとやばいと思う。明日は絶対に来いよ」

「命令すんなよ」

「命令してるつもりはないよ。お願いしてるんだ」

「おまえ、なんで俺にかまうの」

「かまうって・・・」

「友達だからとか言うなよ。とにかくキモイから」

「わかってるよ。ただ俺、転校してきてりよっちの球初めて見た時すげえびっくりしたんだ。それまであんな速い球見たことなかったし。こんなすごい球投げるヤツとチームメイトになれるって嬉しくてさ」

「うぜーな。だから何だよ」

「うん、だから俺、最後の総体には絶対にりよっちと一緒に試合に出たいんだ」

「どうせおまえなんか補欠だろ」

「いいんだよ、それでも。俺どうしてもしりよっちと同じチームで野球やりたいんだ」

健太郎は声を張り上げた。気恥ずかしくなるような言葉が素直に口から飛び出して来るのが自分でも不思議だった。

「でも俺が犯人だったら試合に出れねーじゃん」

「りよっちはそんなことするやつじゃないよ」

「おまえ俺のことどれだけ知ってるんだよ」

「知ってるつもりだよ。確かに会ってからそんなに日はたっていないけど・・・りよっちは卑怯なことはしないよ」

「何も知らないくせに勝手なこと言うな」

「何でさ、一ヶ月一緒に練習してきたんだ。どんなやつかくらいわかるよ」

「いいから俺のことなんかほっとけよ。総体なんかもうどうだっていいし」

「何かあったの？昨日も部活来なかったよね」

「やる気が出ねーんだよ」

「中学最後なんだよ。いろいろあるかもしれないけどさ、みんなで頑張ろうよ」

亮太はハン、というように鼻で笑った。

「おまえさ、さっき俺の親見ただろ」

健太郎はさっき見た金髪頭の派手なおばさんを思い出した。「二度と帰って来んじゃねえぞ！」亮太に向かって確かにそう怒鳴っていた・・・

「どっかの誰かさんみたいにな、いつもパパとママが揃って試合見に来るようなヤツに俺のことなんかわかるわけねえんだよ」

「でも生きてるじゃないか」

今度は亮太が問い返す番だった。

「何だって？」

「生きてるじゃないか」

健太郎はもう一度同じ言葉を繰り返した。

「どういう意味だよ」

「俺の母さんさ、ガンなんだ。乳がんだって」

「――」

亮太は言葉を失った。胸の辺りに何かで殴られたような衝撃が走る。

「つつ中に転校してきたのも母さんの病院の近くに引っ越したからなんだ。前の家は通うのに不便だったから

――」

「で？死んじゃうのか。おまえのお袋」

「いや、手術はとりあえず成功したらしい。でもいつまた再発するかわかんないんだってさ。今は放射線治療とかいうやつをやってる」

「ふうん。そっか・・・」

「俺は、親が明日も明後日もそのまた次の日もずっと元気であることをあたりまえだと思っていられるやつがうらやましい」

しゃべりながら健太郎が腰を上げる。

「俺さ、母さんがガンだって聞かされた時、ああ、親っていつか死ぬんだなあ、って思ったんだ。もちろん母さんにはずっと元気でいてほしいけど、どっかでそういう覚悟はできてるんだ、俺」

亮太は健太郎の横顔を見上げた。親に甘やかされてぬくぬく育っているとばかり思っていた健太郎が自分よりもずっと大人に見える。親はいつか死ぬ。自分よりも確実に先に親はこの世からいなくなる。そのことを本気で考えたことは亮太はまだなかった。

「命ってさ。いつ終わるかわからないんだよね。俺たちだって今はこうして生きてるけどもしかしたら十分後には事故かなんかで死んじゃってるかもしれない」

「縁起でもないこと言うな」

「でもさ、先のことは誰にもわからないだろ。だから俺、今できることを精一杯やりたいんだ。やるって決めてんだよ」

「何だよ、今できることって」

「総体に出ること」

「おまえ補欠でもいいわけ」

「そんなのわかんねえだろ。これからレギュラーとるかもよ」

「無理だろ。和久井がいるし」

「それでもいいんだ。補欠だって野球をやることには変わらないんだからさ」

「試合に出られなくてもか」

「うん、いいよ」

「あのな、そういうのをただの強がりっていうんだよ」

「いや違う」

健太郎はきっぱりとそう言い切った。

「そりゃ俺だって試合には出たいさ。すごく出たいよ。それが本音だよ。正直くさった時もあつたしね。でもさ、俺やっぱり野球が好きなんだ。ほんとに好きなんだよ。そう思ったら補欠でもいいじゃねえかって思えてきてさ。りよっちみたいな人からは強がりにも聞こえるかもしれないけど・・・とにかく今はつつ中のみんなと野球がしたい。りよっちと一緒に野球やりたいんだ」

「一人で青春してんじゃねえよ」

「おいおまえら」

背後からの声に二人揃って振り向くと入り口に悟が立っていた。

「なんだ、どうしたんだよ」

「いや、今りよっちの家に行こうと思ったらおまえらがいたからさ」

「おまえもか」

亮太は呆れた声を出した。

「りよっち、明日は学校に来いよ。総体までもう少ししかないんだぞ」

「部長命令か」

「違う」

悟は視線をまっすぐに亮太に向けた。

「友達としてだよ」

と・も・だ・ち。友達だって？

「おまえな・・・」

よくそういうキモイことを真顔で言えるよな。小学生かよ、おまえは。亮太は心の中で突っ込みを入れた。でも悟はもともとこういうヤツだった。ガキの頃から全く変わっていない。

「ほら」

悟は亮太にグローブを投げてよこした。

「りよっちのだろ。部室に転がってたぞ」

「ああ」

「今日はりよっちと練習するために来たんだ。俺、りよっちのフォーク絶対に捕れるようになるから」

悟はキャッチャーミットを付けた手をかざしてみせた。

「りよっちの球なら絶対に勝てる。全国優勝しようぜ」

「はっ？ んなのできるわけねーだろ。バカじゃねえの」

「バカでも何でもいいよ。来い」

悟はミットを構えた。

「じゃあ俺が審判するよ」

健太郎が悟の後ろに立つ。

「しゃーねえなあ」

亮太は観念したようにボールを握り、ゆっくりと振りかぶった。いつのまにか辺り一面に広がった夕闇が、三人をオレンジ色に照らしていた。

いつのまにか周囲が明るくなってきた。

——朝だ。

卓也は自転車置き場から顔を出して階段を見上げた。

もうすぐここをアイツが下りてくるはずだ。そうしたら・・・

いきなり背中を突き抜けるような寒気が襲ってきた。

——さむ・・・

卓也は奥歯を思い切り噛みしめた。春とはいえ、まだまだこの時間は冷え込む。しかし苦痛ではない。かえってそのために身体中の神経が鋭敏になってくるのがわかる。卓也はジャージのポケットに手を突っ込み、冷たい感触を確かめた。もう後戻りはできない。あの日以来、すさまじい怒りが体の奥から繰り返し繰り返しわきあがってくる。それは今まで経験したことのないほどの勢いで、まるで皮膚を貫くかのように、ある感情がひっきりなしに卓也に襲いかかってくる。自分でもどうしていいのかももうわけがわからない。

その時だ。階段の方から誰かの靴音が聞こえた。

来た！

卓也は暗がりに身を潜めたまま目を上げた。アイツだ。見覚えのある紺色の背広。

卓也はもう一度ナイフを握り直し、自転車置き場から飛び出した。

うわああ————っ！

そう叫びながらがむしゃらに突き進むと、相手が驚いて振り返った。かまわずそのまま真っすぐに飛び込んでいく。指先に鈍い感触がした。視線を下ろすと足元に赤い血だまりが染みのように広がっている。その染みの上に相手が膝をついて倒れこんだ。

やった。とうとうやった。卓也は肩で息をしながらはつきりと達成感を感じていた。こいつが悪いんだ。こいつが俺のことをクズ扱いするからだ。

復讐してやっただけだ。異変に気付いた歩行者が騒ぎ始めた。周囲の喧騒をよそに卓也は空に顔を向けて高らかに笑い声を上げた。

「もうあきらめようよ」

つつかがげんなりした声で言う。

「もう授業始まってよ」

「うん、もうちょっと」

健太郎は数メートル先の下駄箱から目を離さずに言った。

こうして休み時間ごとに下駄箱の周辺を張り込んでから、もう二週間が過ぎた。

「もう誰も来ないって」

「うん」

「早く戻らないと先生に怒られるよ」

「つつか、先に戻っててよ。俺、もうちょっとここで見張ってるからさ」

「そんなことしたって無駄だよ。だってあれは卓也君がー」

言いかけてさすがにやばいと思ったのか、つつかが言葉を飲み込んだのがわかった。

確かにつつかの言う通りこんなことをしても無駄なのかもしれない。

でもりよっちも言っていたように、健太郎は一連のことを卓也がやったとはどうしても思えなかった。

あれから卓也が曾根の父親を待ち伏せし、ナイフで刺すという事件を起こし、学校は大騒ぎになった。幸い傷はさほど深くなく、軽症だったということ、また曾根の父親の配慮もあったとかで事件にはならないで済み、今は卓也の処遇について、大人たちがいろいろ話し合っているらしい。卓也はあれきり学校に出てきていない。今後のことがはっきり決まるまでは自宅待機だそうだ。

当然この大事な時期に部活の練習にも出られない。

「とだけんは卓也くんが犯人じゃないと思ってるんだ」

「うん。たぶんね」

「でもさ、曾根くんのお父さんにあんなことしたってことはやっぱり・・・」

「あいつの性格だから、犯人扱いされたことにむかついたんだろ」

「そうかもしれないけど、それだったらやり過ぎだよ。疑われたって仕方ないんじゃないかな。僕はそう思う」

「まあね」

確かに相手を待ち伏せして刺すなんてやり過ぎだ。どんなにむかついても世の中にはしてはいけないことがある。そんなの小学生でもわかることだ。

でも一方で卓也がそこまで腹を立てる気持ちも健太郎にはわかる気がした。

これはきっとプライドの問題だろう。

「だからさ、もう何も起きないよ。ほら早く行こうってば」

「つつか、別に俺に付き合わなくてもいいよ」

「そういうわけにもさあ」

つつかが困った顔でうつむいた。

健太郎にしても確信があるわけではなかった。仮に健太郎の想像通り、曾根に嫌がらせをしたり、荒川のグローブをボロボロにしたりしたのが誰か他のヤツだとしても、もうこれ以上何もしてこないかもしれない。卓也に疑

いがかかっている限りその可能性の方が高いだろう。

でもだからといって何もしないではいられなかった。

ただの自己満足かな・・・。

健太郎がふとそう思った時だ。

下駄箱の向かいにある来賓口から一人の女の人が校舎の中に入ってきた。きっと誰か生徒の保護者だろう。そういえば、午後から緊急でPTAの集まりがあるとか何とか由美子が言っていたっけ。ヤバイな。下手に見つかって、注意でもされたりしたら面倒だ。

健太郎は反射的に柱の影に体を隠した。

保護者用の会議室は二階にあり、階段は来賓口を挟んで健太郎がいる方とは反対側にある。PTA関係者であれば、そのまま廊下に沿って向こうに歩いていくはずだ。

しかし、健太郎の予測に反して、その女の人はずいぶん廊下を横切り、生徒用の下駄箱に近付いていく。そして誰かの下駄箱の前で立ち止まった。

——？

あいにくこちらに背を向けているので何をしているのかはわからないが明らかに動作が不自然だ。

少しして女の人がその場を離れ、階段を上がっていくのを確認すると、健太郎は急いでその場所に駆け寄った。

——三年二組。曾根の下駄箱じゃねえか。

見たことのある履き込んだナイキのスニーカーの中に、小さく折りたたんだ紙が入っている。

紙を広げて見ると、「死ね」だの「逝ってよし」だの、およそあのおばさんが書いたとは思われないような言葉が書き連ねられていた。

「嘘だろ・・・」

健太郎は何が何だかわからなかった。

「ねえ。今の誰の母ちゃんかな。つか知ってる？」

返事がない。振り向くと、つかかが青ざめた顔をして立っている。

「どうした？つか」

「僕の」

「えっ？」

「今の・・・うちのお母さん」

健太郎の手から紙がはらりと落ちた。

野球部に起きた全ての事件は、つつかのお母さんが一人でやったことらしい。

何となく健太郎の耳に入ってきたことによれば、普段からレギュラー組の態度の悪さに不満を感じていて、ストレスがたまっていたそうで、自分でも行動を止められなかった。曾根や荒川に嫌がらせをしたのは、レギュラー組の誰かに容疑がかかり、野球部がめちやくちやになればいいと思っただけのこと。あの二人にターゲットを絞ったのは、個人的に曾根らの親が嫌いだったから。

いっそのこと野球部が総体に出られなくなればいいとさえ思っていた。

すべては息子のためにやったということらしい。

一体何が息子のためなのか本当に大人の考えることはわからない。

実際、このことが明るみになってから、つつかは登校しなくなった。健太郎が何度かメールをしても一切返信がない。

つつかの母親がやったことは全然息子のためになんかなっていない。むしろ害にしかなっていないじゃないか。それが母親の愛情というものだとしたら、そんな愛情なんか絶対にいらぬ。

つつかと入れ替わるように卓也が学校にきた。

大人の世界で何をどう話し合ったのかはわからないが、曾根の親の計らいもあり、卓也は罪に問われる事態にはならず済んだようだ。

曾根の親も卓也を疑って学校に怒鳴り込んだ手前、ばつが悪いからだろう、と誰かが言っていた。

大人の世界はさっぱりわからない。

この件が明らかになってから由美子は半日だけ寝込んだ。

その前の晩、健太郎がキッチンに行こうと、たまたま両親のいるリビングの前を通った時だ。「私は藤沢さんに利用されていたのかしら」由美子の暗い沈んだ声が聞こえてきて、健太郎はスポーツドリンクを飲むのをあきらめ、慌てて部屋に戻った。何だか聞いてはいけないものを聞いてしまった気がしたのだ。

次の日の朝。健太郎が登校する時間になっても由美子は起きてこなかった。

「おまえ今朝はパンでいいか」

文彦がネクタイを首に巻きつけたまま、二枚分のトーストを焼いている。

「あと足りなければ自分でハムでも焼いて食べ」

「時間ないからもういいよ。母さんどうしたの」

健太郎はさりげなく聞いた。

「ちょっと具合が悪いらしい。でも大したことはないから大丈夫だ」

「ほんとに大丈夫なの」

「今回のことでちょっとショックを受けたみたいだな。まあ大丈夫だとは思いますがもしかしたらしばらく寝込むことになるかもしれない。おまえもできるだけ自分のことは自分でやるようにしろ」

ということだったが、その日健太郎が家に帰ると

「お帰り」いつものように元気な声がして、由美子は何もなかったように普通に家事をこなしていた。家の中には焼き立てのパンの香りが漂っていた。

それ以来、健太郎の前で両親が今回のことについて何か口にするのは一切なかったし、健太郎もあえて自分から話題にすることもなく、いつも通りの生活が行われた。

それは学校の方でも同じだった。顧問の井上先生から部員たちに改めて何か説明があるわけでもなく、健太郎たちはただ普段通り練習を行い、日々が過ぎていった。

健太郎は何度かつつかにメールをしたが全く返信はなかった。電話も出ない。

そんな状況の中でも時は確実に過ぎて行く。

とうとう、健太郎たち中学三年生にとって最後になる総体の日がやってきた。

朝、ベッドから飛び起きカーテンを開けると、快晴の空が窓いっぱい広がっている。

健太郎は昨日監督から配られたグレーのユニフォームに袖を通した。背番号十二番。

試合には出られないかもしれない。しかし何が起こるかわからない。いつだってそうだ。

健太郎は由美子が作ってくれたおにぎりを二つと、スポーツドリンクがたっぷり入ったボトルをエナメルのカバンに押し込み家を出た。由美子もエプロンで手を拭きながら玄関先までついてくる。

「後で応援に行くからね。頑張ってよ」

「はいはい」

「ほんとに頑張ってよ。悔いのないようにね」

「わかったから。じゃああとでね」

学校までの道を走りながら健太郎はつっかにメールを打った。

「おはよう。今日は試合だぞ。絶対来いよ。待ってるからね！」

よし、送信！

「よーしみんな集まれ」

監督から号令がかかり、皆キャッチボールの手を止め、グラウンドの脇に集まった。

「今日のメンバーを発表する」

大方決まっていることとはいえ、やはりこの瞬間は背中にピリッとしたものが走る。健太郎は背筋を伸ばした

。

「ピッチャー久慈亮太。キャッチャー高田悟・・・以上」

予想通りいつもの面々だ。予想はしていたがやはりがっかり感があるのは否めない。いや、それが当たり前なんだ。レギュラーに選ばれなくて何とも思わなくなったらもうそこで終わりだ。それに試合はトーナメントだ。途中で何が起こるかわからない。最後まで選手として戦う。絶対に。

健太郎はゆっくりと自分に言い聞かせた。

「レギュラーアップ」

悟を先頭にレギュラー陣が一斉にグラウンドに駆け出していく。

こっちは今のうちに水分補給だ。健太郎が歩きながらふと先に目をやると、後ろの茂みのところに、一、二年生と同じ白い練習着を着たつっかが立っていた。

「つっか！」

健太郎の声に皆が一斉に振り返る。たちまち、つっかが今にも泣き出しそうに顔をゆがめてうつむいた。

「何だよ、遅かったじゃん」

健太郎はわざと思い切り明るい声を出してつっかの側に近寄った。

「ほんとは僕なんか来たらだめなんだけど」

「何言ってんだよ。そんなことないってば」

「みんなに迷惑かけたから、お母さんのことで・・・僕・・・」

「つっかが悪いわけじゃないだろ」

「でも・・・」

「誰も気にしてないって。なあ」

健太郎がそう言って振り向くと、皆、何を言っているのかわからないといった複雑な表情で立ちすくんでいる。

「ごめん、やっぱり僕帰るよ」

「待って」

健太郎は慌ててつかかの腕をつかんだ。このままつかかを帰すわけにはいかない。

「親のことは俺らには関係ない」

声を上げたのはりよっちだった。

「おまえたちもそう思うだろ」

りよっちは相変わらずくっついてる曾根と荒川コンビに向かってグローブを突き出した。

二人が戸惑ったように顔を見合わせる。

「なあ、そうだよな？ちゃんと答えろよ」

皆の視線が一斉に二人に集中する。

「うん、わかってるよ。そんなの」

荒川が巨体を揺らしながら言った。

「わかってるんだよ。俺たちだって」

曾根もその動きと合わせるようにうなづく。

彼らもきっと今まで彼らなりにいろんなことを考えていたに違いない。

健太郎はつかかの肩を軽く叩いた。

「おまえら今日はちゃんと声出せよ」

卓也が偉そうに言い放ち、グラウンドに走っていく。

「うるせえな。いつも出してんだよ」

いつものように怒鳴り返ししながら、こんな野球部もいいかもしれないな。健太郎はふと思った。

俺たちは決して仲良しではない。むかつくこともたくさんある。テレビドラマや小説に出てくるようなチームとは程遠い。問題は山積みだ。

ただ今この瞬間に、皆がそれぞれの事情や思いを抱えながら野球をやっている。同じ季節の中で同じ時間を過ごしている。それは人生という長い時間から見れば、本当にわずかなただのいつきに過ぎないかもしれない。でもきっと今こうしてこいつらと一緒に走り、笑い、怒り、野球をやっていること、それら全てがすごく輝かしいものとして心に刻まれていくのだろう。

「しまっていこう！」

健太郎は空に向かい思い切り声を張り上げた。

試合が始まった。